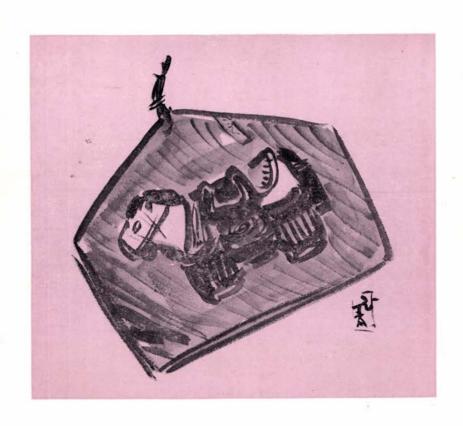
#### 川物塔



川柳ゆーもあ特集

新年号





グイグイと働き、休日にも朝から戸外へ とび出せる

こんな方は、きっと細胞が元気!

アスパラ・Lは全身の細胞に、直接働きかける活 性アミノ酸剤。毎日のんで、常用効果をどうぞ…

- ●疲労 ●心臓 ●肝臓 ●神経痛
- ●疲れ目●手足の脱力感●湿疹



このマークの 薬局・薬店で お求め下さい





50 - 100 - 250 %

グゲッと元気 PRRSC

新発売 アスパラ目薬



#### 月 のこ لح ば

元旦の悲願をくりかえす。 〇来る年も、来る年も、倖せに、明るくと

願も是非ないことだと思う。 の新しい沈黙をかきわけてゆく上にはこの悲 〇一見愚かなようにも見えるが、全く未知

〇「一番私が尊敬する人物は、毎日毎日の

小路さんの言葉を憶い出す。 を味わってゆける人間だ」と言う意味の武者 るあたりまえの生活の中で無限の愛情の深さ 生活の中に変化を求めるよりも、平凡に見え

生々庵

られっぱなしの人生は妙味もなく寂しい。 宿命の正態 つれ添うて四十年

〇やたらに野心ばかり燃やして、追いかけ

中島 生 Þ 庵



川柳塔新年号

# 川柳塔新年号目次

月

0

2

2

ば

題字・中島生々庵・表紙・直原玉

中島生々庵選……(1) 中島生々庵選……(6)

中島生々庵……(4

へ 同 人 作 品……へ 笑 い 言 葉……

重

さ

深

さ

厚

さ

柳

塔

(同人作品)

・滋雀・笛生・弘朗・半月・いわを・庸佑・あいき・無木・文秋・一舟・独仙・句楽坊・清人・自由朗・吸江・天郎・魔花麗・暁舟・静水・光郎・章雅・芳仙・孝正・甲吉・一声・甦光・愛鳩・没食子・杜的・柳宏子・凡生、酢・阿茶・季賛・八郎・保・十九平・野迷路・高志・阿喜良・きき子・どんたく・弘生・破竹・久米雄・形水霊眼・阿茶・季賛・八郎・保・十九平・野迷路・高志・阿喜良・きき子・どんたく・弘生・破竹・久米雄・形水霊眼・阿茶・季賛・八郎・保・十九平・野迷路・高志・阿喜良・きき子・どんたく・弘生・破竹・久米雄・形水雪眼・阿茶・季賛・八郎・保・白溪子・紅雨・古方・一水・鉄舟・不酔・梅志・幽谷・竹荘・柳葉・柳志・静馬・井蛙・好郎・水客・七面山・桂仙・小松園・圭井堂・素身郎・花梢・栞・清子・専翁・湖平・緑之助・快夢起・喜由・好郎・水客・七面山・桂仙・小松園・圭井堂・素身郎・花梢・栞・清子・専翁・湖平・緑之助・快夢起・喜由・好郎・水客・七面山・桂仙・小松園・圭井堂・素身郎・花梢・栞・清子・専翁・湖平・緑之助・快夢起・喜由・ 路・静歩・美房・一三夫・

川柳点における軽妙洒脱

SII

達

義

雄

38

ゆーもあ特集・

**- 2 -**

北

JII

春

巣

24

26

1	*		_		★各	★太	★柳	作	金	大萬	近	大阪	雅号	]]]	水府	][]	秀	雑
後 配		Jul.	路		7		Dr					文	つぶつ				<i>L</i> -1	
( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) (	集		集		地	+	界	们	泥	柳一	1/=		うち	3	干松	社	ПJ	
(名簿 (前月号から) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) (	後	了珍	「和	П	柳	二月	展	教	DE	書	柳	][]	け		0		鑑	
(第一、(前月号から) (前月号から) (新 佐 志 一 後 藤 梅 志 一 後 藤 梅 志 一 6	記:	3		馬	DP.		150			3	= 10				句			
世 水 尾		1		」木	檀	会	望			表						簿	(前月号から)	
index							1	100	生	水			111	ria de				
助茶二 りゅう 日 乃 柳 栞里 秋 阿 静 ゝ 一 悔 良 悪 選選記 茶 馬 む 志 乃	-	緑	阿	遠	· ·	·· (#		八					Ш	局			乃於	<b>T.</b>
	柳					(佐):	(風) :	白					阿	静			梅	葭
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	三夫	選	選	選			3	柳	選	選	選選	記	茶	馬	む		志	乃
	71	53	52	52	63	60	58	50	47	56	42	54	55	40	48	40	20	22



重 深 さ

厚さ

島生々庵

中

# 謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

た「川柳塔」にとっては一入の歳の暮れであり、新しい年でもあったことは言わずもがなでありまし あわただしい中に「川柳塔」が初めての正月を迎えました。 柳界全体にとっても未曽有のあわただしさであったし、そのあわただしさの「目」の一つになっ

よう。 あります。 中にこそ生きがいの希望やたのしさもありうるわけで、絶対に挫けてはならぬ大切な歳の正月ででも る。 らさきに予想される重さ深さ厚さを考えてみると恐ろしいようでもありますが、その苦しさ恐しさの のしかかるような重圧を静かに謙虚に受けとめながら新しい年を迎えたわけであります。これか 川柳雑誌」廃刊の後、 まだかわきやらぬ涙の跡に、ともすれば力弱さ、寂しさを誘いこもうとす

とりましては、そうしたほのぼのと心ゆるむ心境には程遠く、蕾もかたく、 初日の出と共に心改まり、物みな新しい感概が湧くものではありますが、 これから日増しに厳しさ 現時点での「川柳塔」

太陽がふりそそいで来る日を希望の胸ふくらませながらじっと期待してゆきたい念願であります。 を加えて来る寒さに耐えぬく梅の花の覚悟が強く求められている気持ちであります。 やがて洋々たる

先年ロンドンに参りました折こんな話を聞きました。

あったので猫はかわきを我慢して水をのまずにたち去って行ったというのです。 角の動物用給水場で猫が水を飲もうとすると、フオア ドツグス オンリー (犬専用) 7

ます。 他を妨げず、 他に妨げられず」の折り目正しい個人主義と感心してばかりは居られぬ話だと思い

猫の違いでしよう。 日本人の誰れもが開放的なタタミの生活を大変恋しがるあけっぱなしの習性。 づけて蒲団を敷けば寝室となる六畳の間で遠来の友と語りあかす習性。 旅は道づれの親しさも薄く、 日本の猫ならどうしたことでしよう。 未知の人にはなるべく話 「おい兄弟、 お世話になるぜ」で事は足りたと思い しかけないアチャラの生活と、 外国生活をちよっとでもした ロンドンの猫と日本の チャブ台を片

恐れさえあるのです。
一が乱れ、弱わまり、結局分裂にまでゆきかねないセクト主義、なわばり根性、独善主義は却って統

いう意味であります。
にんな事をいうたとしてもそれは勿論没我でも、無条件降伏というのでも絶対にありません。床をな無条件降伏というのでも絶対にありません。床をな

皆様、どうぞよろしくお願い致します。いうのであります。いうのであります。「川柳塔」をこんな気持ちで育ててゆきたいとの念願で屠蘇を酌みたいと



#### 結婚式場

近代的な設備をととのえた 関西一の結婚式場 貸衣装も 豊富にそろえております● 6階



大阪日本橋 松坂屋 TBL 631-1171



高槻市 若 柳 潮 花

滝口寺

納得のゆくまですねてから帰り

人形師のように顔師は書きはじめ

横笛の衣裳も天井も雨のしみ 小倉山の水とて恋の茶をすすめ

落柿舎

高葺の 苔が素朴な味を出し

ほつれ毛が欲しいかずらの髪の艶 生涯の恋を舞台にかけて舞い 手のひらで雨たしかめて出る楽屋

池上知恵美さんを弔む

道後へは呼んではくれぬひとになり

芦屋市

丸

]11

初

甫

雄鹿にも似てハードルを飛ぶ若さ 継ぎ継ぎの小包の紐も有難く 直ぐハイと言えぬ不作の女房とか

見詰むれば僕がだんだん小そう見え 千円札新生一ツとは淋し 岸和田市

き

さ子

世しのびの里のムードを一人ゆく

籔と紅葉一石二鳥の窓二つ

持ち変える相合傘の手の温み

祗王寺

中

本 III 春

北

巣

選

若

選

選

兵庫県 小 西 無 鬼

美しう剃つて尼さんのインタビュー 内 藤

心の濁りが見える鏡があつたなら 三日月へわたしひとりにある祈り

見舞客毒な話もして帰り

大理石の門をかこんだ逮捕状

豊中市 戸 H 古 方

おうようになれぬところがまたとりえ よろこびが感謝になつて来たわたし

見直したと褒めたつもりでいうたのに 我の強いとこみな違うのがおかし

が間違うては例外とはならず

大阪市 Œ 本 水 客

秒読みにはいつてるとは気が付かず やせ我慢しているうちに忘れられ おみそれをされた微笑が消えぬまま

本当の涙は膝にしみてくる 薄情な音にもとれるオルゴール

大阪市 市 場 没 食 子

けん引車の役を定退また候 三本目です赤い羽根よう落し ゴルフでもやれと気楽なようみられ

東京の孫大阪の孫別居は寂し 孫抱きに会社の帰り廻り道

老らくの熟柿の如き片思い 滝泳る信ずべからぬささめごと 元日や歯の美しいお嬢さん 大阪市

橘

高

薫

風

コスモスのほったらかしの美しさ

叔父さんそう呼びたかつたあなただつたが 悼高須啞三味氏

値上げ値上げベースアップをあざ笑い 大阪市 西 田

柳

宏

あんよは上手泥の足跡嬉しがり 一瞬の迷いが後手へ又廻わり

温泉に来てまで留守を母案じ

念には念入れて切手を貼り忘れ 西宮市

若

林

草

右

社運から山荘ことしは門を閉 家買えぬ憂さを車でぶつとばし

台風二四号来る

台風の準備もピクニックめく娘 おつき合いうちの瓦も飛んでみせ

万全の策とは逃げ出すことだった

馬鹿話出して職場の気がほぐれ 新居浜市

うぬぼれて女難の相と思いこみ

桂 仙

安

藤

7

食う為めの悪女とならんルージュ引く 善人の顔で神まで胡麻化す気

張り切つて見た阿呆らしさ振り返る

尼崎市 長 谷 JII 司

**髪染めて何が嬉しいスラックス** 戦争のニュース明治は鈴を振り ふる里の歌故郷のない男 マダムきよう地髪で行けるスケジュ 1 ル

友の計へ秋空嘘の如晴れる

大阪市 本 多 柳 志

モンキーダンス百科辞典も古くなり 急救車来で野次馬も散りはじめ

国会は牛歩デモではジグザグし 猪は来ずハンターが来て田を荒し

手をぬいた工事へ貰ろた感謝状

高砂市 吉 原 紅 月

掌の平に廻転焼の温 かさ

義理人情云うて苦情へ負けて居ず

柿をむく 葉牡丹が色づいて来て師走 背に晩秋の陽がぬくい

端した金儲ける女の口が過ぎ

そんな日もおありでしたか貯蓄の日 青森市 I 藤 甲

忙が

しいやない

寿 旧姓に戻り男にあきれ果て 横綱は負けて見出しに使われる 社長室友は昔の友ならず の字を書く筆を整える

もう一度念を押しとく利子のこと 着ぶくれてもう貫ろくを通り越し ことさらに帯きつくしめ藤の アドバルーンたどれば堺筋 うなじとはもう程遠し老妻の へ出る 雨

大阪府

高

津

徹

也

大阪市 不二田 = 夫

カー スランプのペンひつかかりひつかかり パパの作ラジオの前へかしこまり 臨終に女の秘密だけ云わず 大物に魔の年 各界の巨星相 ・ラツシュああ日本は持てる国 ついで逝去 昭和四十年

高槻市 傍 島 静 馬

おばはんもサンマのような靴を履 自家用の置場に農家事欠かず ナスに予想を越えたためしなし かと税務署賞めてくれ

倉敷市 垣 方 大 平服になつても看護婦さんの声 組織の中でお人柄を買われ

スイッチをパチパチ新婚の食事 単身赴任生理出張許される 旅をすりや当然のよう週刊誌

頭叩かれても笑つていようお元日

大阪市

屑屋より本屋に売ろと知恵が付き 金 井

文

秋

神経痛やいとばつかり推められ 本屋の眼気にし学生ヌード見る

にまで小器用を当てにされ

西 雄

K

小

納得のいかぬ値上げがすぐきまり 米子市

妻からの便り雅号で来て嬉し 単身上京 (二句) 讃美歌は歌えなくともクリスマス

故郷の夢少年のように見る

京都市 大 鶴 喜

由

柘榴の赤掛けて明るい秋にする

女よし財よし貰うて恋という

効能書強精という字に引かれ

嫁かず後家株があがつたいい気嫌 大阪府

兀

60

わ を

通された部屋ひと時の冷やかさ

旅の恥三流館をのぞいてみ 大阪市 Ш

快調なテンポで若き恋すすむ

病んでから寝床のかたいことを知り

さすが病院イキのいいのは来ておらず

応援のテレビの野球に肩凝らし 高い月給命売るとは知らなんだ

粋人でのうて汚職の客ばかり ピンチピンチとつちの唇干つからび

先がもう何年あるかお正月 爺くさい顔で座つたお元日

わびしさは賀状符箋で戻って来 まだ若いととがどこかに残つてい 岡山県 浜 田 久 米

雄

日に一度は孫や子の話 大阪府

打ちこんだいくたりいつか名を忘れ

早.

JII

清

生

成らぬこと多くしきりに山恋いし 流人島矮い墓みな海を向く 棚の盆栽があり旅に出ず 竹原市 杉 原 愛

鳩

JII 回 茶

堺 市 吉 田 畫 # 堂

関連でそのまま立てぬ七転び 見晴らしがよければよいで風当り

柿の木に一つ残して春を待つ **〆めてみれば連続安打無得点** 

岡山県 本 田

恵

朗

花嫁をひやかす叔父がいてなごみ

長講一 珍客にされたは女房の方でした プロ入りをする気にさせた金メダル 席満場を眠らせる

岡山 市 服 部 九 平.

こぎれいに蚕緑の糞をする 目出度さが重なる今年屋根替

城址に午砲を撃つた跡が朽ち 紹介の好きな先輩にも困り

玉島市 日 井 林 坊

美容体操四十のヒップままならず たとえばの話しへ妓むきになり

ところてんに似て元旦へ押し出され 国会はあきれてばかり見ておれず

婚約の後へ良縁持ち込まれ 人みんな悲しむ中に死なんかな 岡山県 直 原

七

面

Щ

表彰の感激もなく退職す

人生も川の流れに似て曲る

当分は退職金で遊んだろ

何をする人ぞ芸妓が見舞に来 独り居て 涙は重きものと知り

大阪市

儿

出

先客は女 赤とんぼとまつて野菊手折られず 欠伸出るまで待たされる

就職難おやじの会社継ぐと決め 末つ子も巣立つて急に老けはじめ

物価高嘆きつダイヤの指輪する

新居浜市

小

林

孝

īE.

孫のような妓が僕に火を点ける 女房の愛の尊さストもなく

社の書類忘すれてまずいとこで酔 10

奈良県 草

深

酔

升

移植した庭へ平和な雨が降り 行く秋へ体が二ツ三ツほしく 働きに出たのに悲運蟻踏まれ

堺 市 富 やや抱いて会社の友に見て貰い

忠告を素直に受けてよろこばれ 出

> 淡 舟

大阪市 河 井 庸 佑

批評会ほめて最後にけなしとり これつぽち上げてもらうに旗を振り

言いたいこと言えと言わしてマークされ 庭いじりできぬ団地がいやになり

陰口を云わぬ稽古に四十年

大阪市 福 井 野

> 迷 路

今年から年齢逆算おらが春 半世は手帳のメモで動かされ ぺこが鱈腹へ早や二十年

長 野 井

蛙

山口県

滞納が役所を泥棒呼ばわりし 無い袖もふれる政府の隠し金 這

い上る根気は蛆虫でさえも持ち

不景気へ強気は政府と株屋だけ

大阪市 天 西

晩秋へハンター族の出番くる バタバタ貧乏ですよと貯めている

彼の名を土に書くのも恋なれや 青空へカンバス族が狩り出され

値切るだけ値切り大きい札で買い 出雲市 中 111 晃

男

使い込みせぬが出世もせぬ真面目

読書週間立ち読み大目に見るとする

賽銭は値上げをせずによく願い

呉

市 林

野

甦

光

これからが大変 欲求不満ビートルズ型で来る 孫に足がつき

泳ぐのが好きとは夜の街を云い

あと三日給料迄を割つて出し

奈良市

宮

笛

生.

編物の器用さ車内の目を集め 熱燗にする晩酌は風邪をひき 栄養がすぎて脚気のじん臓

面白い落書があり便所暇

重役になった歩巾でドアを開け 平田 市

家

代

仕 男

髯くらい剃れと仏が叱りそう 釣れぬ日の魚籠は互にのぞき合い ノド自慢パンチが有るのイカスのと

腑甲斐無さ蛸一串をもて余し 神戸市

仲

どんたく

墨染をからげて禅僧酌いでくれ 御供養の精進あげのおどり食い IÍI 圧の酒はグラムで飲まされる

11

中年は馬鹿さわぎしても白々し印税を寄附の気もあり遺著を買う	大阪市	貰うもの貰えば鼻声もう出さず	共稼ぎするやないのと無理に添い	啄木も貧しかつたとなぐさめる	抱くように愛する人の靴みがく	大阪市	思い出を語れば故人ばかり出る	子を持たぬ夫婦賢い猫を飼い	老の身の何もしないで時惜しむ	妻の顔見る気で見れば皺が殖え	笠岡市	清濁を飲んで課長の赤ら顔	立飲みの二級酒働く明日があり	バリカンを中断させて子のシツコ	待たれるも妊娠恐れられるも妊娠	枚方市	倦怠期話せば話すほどこじれ	くろうとの声でおかげん尋ねられ	里芋が猿臂伸ばして雨を待ち	出世したのを真ん中にクラス会	篠山市
	Jil					水					木					宮					遠
	П					谷					山					JII					山
	弘					竹					遠					珠					可
	生					荘					_					笑					住
ブラブラと鑑札の如しペンダントチャンネルで一週間を切り刻み	兵庫県	思慮浅き汀の砂をもてあそぶ	思い出の落日人魚は海の夢を見る	断崖の波の自由が寄せ返えす	童心が一つ二つと去り大人	西宮市	信濃三度下宿へ炬燵の掛布団	信大の四男へ	白髪染妻のうなじの哀れとも	妻へ	諍いの目と目呼鈴鳴つている	云うことは山程朱唇噛んで耐え	大阪市・	あめりかの見える丘あり七士の碑	三ケ根山戦犯七士の墓	六百円名神の借りへしてやり	蘭ありて浮世の苦労気にならず	釣にゆくのは女房見送らず	大阪市	七十才もう勲章を辞退せず	片手間の抗議 役人にあやされる
	河					樋							今						福井		
	原み												西						井多		
	0					舟							章						蘭		
	る					遊							雅						子		

冬の蝿イミテーションのバラに動かず 気味悪るさ吠えない犬のような奴

下関市

原

里

Ŧ

何んべんも本人ですかに腹が立ち よそ様は素直な夫とおつしやるが

待ちぼうけ二度までくつてまだこり

ず

あてられて満足そうに戻る母

子の服と同じ柄きて母若し

智

水

欠点が好きですと云う恋があり 路郎先生の仏前を訪ねて

合掌へちらりと光る師のメガネ

門真市 福 島 鉄

児

おしつこを辛抱させているラツシュ 血圧を気にして下戸の席に居る マイカーもガレエジまでは傘をさし

大阪市 宫 尾 あ 1) 去

犬に口輪はめて奥さんよくしやべり 可愛い可愛いと野菊手折られて

お隣が歯科医と云うに今治水

加賀市 野 村 味

Ψ.

学成らずふるさとの土も遠くなり いつまでもあんたは若い見直され

仁術も今は人体修理工 大器晚成老人会々計

めし粒で鯛をつる気の特級酒

七五三祝いにピアノねだられた

岡山県

大

森

娯

句

楽

自家用ねだる免許を子に取られ 気楽さは欠かさぬ風呂と晩酌と

競輪の序でを寄つて子の意見

姫路市

小

畑

自

由

朗

ああ先生

錻力屋にあらずKK鈑金工作所 先生の柳話に弥陀もかしてまり

信号より巡査に注意してとばし

背伸びして女世帯に意地があり 美称市 安

平

次

弘

道

傷口を広げる嘘が出る恐さ あさりの抵抗砂をはき出さず

奥 谷 弘

朗

便利だが味気ない気のする文化 下役の無口に意外な意地があり 物識りのようで案外出世せず

初対面指のオパールに気を抜かれ

市

高

崎

雄

声

13

堺市田 中狂 二

自家用車家族揃つて銭湯にゆき

捨てた過去想い出すまい鏡見る

京都市松川杜的

不快指数にエレキも一つ輪をかける

竹原市 山 内 静 水

恐縮の至りどた靴そろえられたとえばの話へぶつつり来なくなり

働き蜂医者の世話にもならず逝き

岡山市 江 国 幽 谷

プロ級の力で半目勝つておき

ガレツジの中でバアさん乗つて見る特ダネへ碁石ならべたままにされ

伊丹市小川静観堂

前癌状態どころでない国の多いことよう刺さぬ蚊が飛んでいて冬に入る箒目にわびを悟れと庭の石

下関市桜川不水

デモクラシーもう此の辺で止して欲し

初卵中風に良しとしるし付け

が中風に良しとしるし付け 高槻市

福

田

T

路

有名税なんとか云つて寄附をさせ

あたhyを迎えて 名月をだしに飲む手を思いつき

満六十才を迎えて

六十の胸を叩いて意気天をつき

奥様のお出掛女中の唄になる

ハワイ

羽

佐

間

柳葉

婚約期二人に苦など更になし

飲まされる積りで行けばお茶ばかり

往診はミニカーレジャーはデラツクス 小松市 関戸 宗

線グラフ社長メガネを掛け替えるまた親を泣かす手紙を代筆し

大阪市 石 倉

旅

風

下手が居て上手が判る詩を吟じ喋るだけ喋つてすつとして帰えり膏薬の脊中へ孫の手を探し

西宮市 野 呂 鵜

汀

灯籠の脇役と言う老松さ

太

郎

バーテンは見て見ぬ振りを心得る

布施市 久 米 奈 良 子

奥さんがほしいと思う女にて

芸術のお菓子も菊花咲き揃い 生菓子展にて

ペンフレンド一度会うたらそのまんま

布施市 本 多 清

やけくその時もやつばり立飲屋 ホテル街ネオンほめてるだけの恋 タイムカード押して働く顔にする

若い僧ラジオ聞きつつ除夜をつき 京都府

西 村 句 楽 坊

元旦だ末香くさい話やめ Ш 一内の平和集めて屠蘇を扱む

高槻市 Ш 季 賛

出札も近代化やつばり暇でなし 冬越す気蜂枕木柵で巣を造り

夜間作業へ貨車黒々と通り過ぎ

諫早市 JII

岡

霊

眼

子

風致林ドン栗はじき眠られず 隣まで延す箒の親しまれ 教祖にも班長持込む忙しさ

> の総人口 ヘビラ配り

> > 加賀市

大

Ш

雅

城

言い訳がますますまずいことにする

小さくしそして大きくして値上げ

シャンとして昼の白衣が灯に踊り 風邪の女房おろそかに菊作り

京都市

室

井八

九

4

〆縄を造るその掌は齢とらず

稲刈がすんで背広が又似合い

鳥取県

清

水

保

背広来て帰ればモンペが出て迎え さびしさをじつとこらえて菊を愛で

世の中に生くる自態がユーモラス 芦屋市

唐

崎

専

何はさて唯物弁証マネー の世

正直 は損でも心徳に満ち

富田林市 吉 出 美

房

赤い羽根すぎたら斗争ビラをくれ 赤い羽根除けのバッジを買うておき いなど来ない同室巾きかせ

玉野市 1 谷 仙

本当を言うのに一晩中迷い

柿りんご皮ごと食べてハイキング

黄金に石が輝く石ブーム

大阪市 児 島 与 呂 志

陽だまりでモデルにされて祖母達者

情熱の歌やと古いのがはやり 信号待ち一パイ飲みたくなるにおい

大阪市 中 JII 滋 雀

老眼鏡かけろと活字に促され

恩給を待つよにオールドミス勤め つり堀の水に染つて鯉無心

和泉市 西 出 洛 酔

ネックレス嬉しくはずむデートの日 終発のメトロに脂粉ぶんぷんと

両手まで上げて悪童路渡り

芦屋市 松 下 た つ み

代表の面子あげ足とつただけ 傍系へきて現役の強み知る

ブレーキがきいて景色が又変り

愛媛県 村 Ŀ 旭 童

撰果場もう百姓のものでなし 雨雲と競走となる脱殻機 地下足袋の新品冬がやつてくる

酒ちびりちびり豆腐の角を欠き

お元気者で困ると子供をあまやかし 引揚者の未練朝鮮漬の味

希望退職へ辞められる倖せ 募金まで役人手数料を取り

谷

沢

好

祐

モールスで決めた夜更けのブザー鳴り 室

大阪市

谷

日本へ来れば外車も神参り セーターの胸はゆれないイミテーション

菊活けて仕事はかどるデートの日

大阪市

田

中

多

浮気した罰のやいとが身にこたえ

御用済みカガシお次ぎはコンクール あつらえの服がだぶつく病上り

別にないつもりの家風朝が明 出雲市

尼

緑

之

助

虫の声寝酒は少しずつまわり うどんスキ家庭サービス組が待ち

大阪市

大

坂

形

水

快復のうれしさ便所まで歩け

岡山県 田 村 藤 波

菊かおる仏間へ叙勲の記事を告げ	岡山県	夜逃げしたやつからすまぬと手紙つ	PRもうまくおりこみ祝辞言い	奈良県	機構改革また役付かふえただけ	後春では、こと下ざいには楽しかり	同僚O氏の計に接し	<b>倉敷市</b>	落ふれてからの世間に鬼はなし	娘の年始カラーフイルム用意する	大阪市	子に送るT 有男のとこへ 肝む	早の代されれしまったラート	季の色だれてしようかでした 島根県	師の旅立ちへ	パパゴルフママ洗濯の空見上げ	大阪市	反対に曲げても盆栽黙つてる	わが税も含む国道九号線	出雲市
7	横	つき		西		り		野			米			藤			酒			原
	Щ			辻				田			虫			井			田			
	_			竹				素身			乃			明			清			独
	击			青				郎			字			朗			子			仙
バドミントンコツポリ下駄を悔いもせず	これやこのエレキブームの明けの春	守口市 羽	シャツ乾く雲が動いて夕焼ける	退屈が幸せと云う子と昼寝	愛知県 原	鉢植の土に苦労のビルの町	静寂がしみる古蹟の落葉ふみ	大阪市 宮	養老院へ行くと祖母が手とずらせ	喜びにあふれる妻の目がきれい	松江市柳	案山子にも似たり課長としての職	三つ編みにしてとそろそろ色気づき	東京都石	ストしよと国会揉めよと農繁期 は暗今日も釣りで留守		言いわけを善人念にねんを入れ	馬売つて牧草むだに生える悔い	布施市 渋	十二月もうける予算と買う予算
せず		原			DK			垃地			学			居居		田田			公谷	
					diefo															
		静			峻一			双			鶴			高		古			$\equiv$	

丸

志

心

楽

時

郎

歩

新居浜市 近 藤 凡 生

うかつにも君が代聞いて泪ぐみ 草を喰む馬になりたい物価高

富田林市 岩 田 美 代

エレキギター今生きてると言う踊り ようやくと本音吐かせて悔いて居り

三次市 和 泉 松 風

駅を出て街のいぶきを身に感じ 仲秋の木次線

多忙でも閑でも金繰りに小企業 標高八○○汽車の中でも冷え初め 富田林市

浅

JII

八

郎

味賞めて妻の機嫌をとる辛さ

笠岡市 出 原 真 奇

笑つてた胴忘れ亡父の年となり くみ交す肴は故里の話しなり

室戸市

奴 田

原

紅

THE STATE OF

かじりつく石もなかつた七転び 酒ぐせも昔のままと酌いでくれ

E キス代も含まれている請求 カソ展人が行くから従いて行き

賀

本

昇

のどを越す頃に鯨肉だとわかり 売れているらしい田んぼに草が生え

倖わせは情熱かける仕事もち

馬の尻たたいて観光客を乗せ

色気ないあくびゆうべがまだたたり 兵庫県

呼出し 小遣いの前借りに来る二男二女 の電話がかかるパチンコ屋

諫早市

産声も高く浮世の風に触れ 役人の酒気は汚職と勘ぐられ

老人会年も似合いのぐち話 この辺でやめて割勘指を折り

大阪市

夫

自

松

江

梅

里

ゆく秋の名残りへもみじ化粧する 初対面屋台で政治ときおろし 一身同体痒いところへ手がゆかず

小松市 馬 場 魚 山

大阪市 天 IE.

千字談が

笑つてたすみいろ信じてい るも歳 岡山県 伊 SII

良

大 江 秋 月

大 筆 染

求人へ三日坊主もまぎれ 方通行行きたい方へ行かせない 込み

午の春 (一句)

清

水

白

柳

老醜をさらすに堪えず筆折らむ 外孫と嫁と箸紙殖えた春

もう来んでよいと保険証返された 乗り出して来たのは世故にたけし 初めて診察を受けて五日間臥床

放屁一発もとのおやじになりにけり

111

村

好

郎

シグナルの青さ自殺あつたとは見えず

玩具部で孫の微笑をふと思い 人間の弱さ鬼門だ三リンボ 悩軟下症とか秋の蠅に似る

祝退院

つまずいてからの石段足たしか

北

III 春

巣 -

尾

お降りへ晴着ちよいちよいのぞきに来 大学院はいりたい子は入れてやり また汚職かと見出しだけ目を通し 口だけが切れ過ぎ外科医こわがられ

ス停の別れ排気を浴せられ

栞

首

いかしげ

かしげ

新しい歳が明け

古

稀近いというのに元旦の陽がまぶし

休みないたたかいとやらで生きる道

アパ 水の歌口ずさみ一本追加なり トの新婚インスタントのよう

大風呂敷ここまでいうと落語めき 元軍人という礼をして借りてゆき 長女、三女、十月に男子出産

3 イドンと産声あげた孫二人

若

本

多

志

おじいちやんの昔話かとは淋 年の暮妻上役へ気を配り 母の命日鮒つりもやめにする

のんのんと年賀ハガキへ並ぶ列 手乍ら死ぬ時コロリとゆきたい

ネ

菊

沢

小

松

袁

なるようになってみんなちりちりばらばら

生きて居れば蠅もうるさいもののうち 水濁り過ぎてもやはり魚住まず 石蹴つても女振り向かず 弁解を助けて関係がん附かれ

ふりむかぬわれをいたわる屠蘇の味 探しものみつからぬまま歳が暮れ 中

> 生 K 庵

島

19

#### 鑑

前 月号から

#### 後 藤 梅 志

つれ舞の扇がはじく舞台の灯

ったことである。 ら、役者稼業も大変なものだと、つくづく思 を演っていた。ひばりの人気もさることなが 空ひばりと林与一が、蛇姫様のお島、千太郎 さき頃梅田コマへ行ったが、その日は、美 (潮

いない。 がとび交うように踊って見せるのだが、重労 まりと思われるから、はなやかだったにちが これほどではなくても、何れは名取さんの集 働といってもよい。潮花さんの出演したのも トは従いてまわり、その輪の中で、女蝶男蝶 い強烈なライトとスポットを浴びる。スポッ たひばりと与一が踊りまくるが、二十分ぐら 劇中劇の妹背山は、お三輪と求女に扮装し

> っているかのようだ。 潮花さんの大役だったことを、それぞれ物語 句は表現は固いが生きている。入選の六句も 鳴り物。こんなことが当然想像されて、この 緊張の連続と、拍手の渦巻きの中へ地囃子の 「つれ舞二つの扇」が孤をえがく本舞台。

#### 秋の浜欠けた貝殼だけのこり

ものはなかったという慨嘆である。さみしい ではないか。夏はあんなに人が出て、はしや いる。どれを拾ってみても、気に入った形の へらされ、すべすべして、へんな形になって 欠けたところは水に洗われ、岩に当ってすり 欠けたものしか残っていない。その貝殻も、 ると、夏のあいだに採りつくされた貝殻が、 秋はさみしいものである。砂浜へ行ってみ 子

> が来て、それを知るだけだという詠嘆が、作 球上の人には分からない。ただ春が来て、秋 けである。地球は自転しているが、それが地 者をとらえたものと思う。佳句である。 い。ただ押しよせる波の音と、遙かな船影だ

ぎ廻っていたのに、いま砂浜には、人影もな

### 横綱がスローモーションで又転び

言いたくなるであろう。 れは非情なことである。 しなければならない。かんがえて見れば、こ って茶の間のファンに紹介されることを覚悟 で、とんでもない負けた場面を、再三にわた ションで見せる。相撲取りも気の毒なも いに、ビデオで映し出し、さらにスローモー の砂へ這わされるものだが、テレビはご叮ね の島のような技ざ師にかかると、綺麗に土俵 大兵肥満の、それも白星つづきの横綱は、玉 大鵬のような横綱が負けると、 ヒイキはもういいと 見物は喜ぶ

から、それを減殺するスロモーションなどは 面などは、肉弾相うつだい醐味があるものだ いやら、悲しいやらである。相撲の力闘の場 高速度カメラで映し出して見せる。ありがた 体をあばき、小さい草花の開花のシーンまで 世の中が科学的になったこの頃は、月の正

されておもしろい。 ころを捉えたものである。手を打ってよろこ 余り有難くない。この句はしかし、面白いと ぶ人ばかりではないことが、この句から想像

#### 不きげんな靴だと自分でも思う

こんな句は、へたな解釈を加えると、作者

あるが、面白い句だとおもう。 人間というものは、頭と、足の先きは、同

の考えと、全くちがったことになるおそれが

いる。作者のもち味というの外はない。 成が、ぶっきら棒に言って面白い句になって と自分を意識したものであろう。この句は構 或る時の自分を顧みて、「不きげんな靴だ」 自分の足ではないのである。作者は改めて、 に入らぬことがあるときは、バナナの皮を踏 出しの時は、足もまた快適であるが、何か気 他人の靴かと思うときもある。順調なすべり いる時と、配置がみだれているときがあり、 其日ではき心地が違う。五本の指がそろって うと思っても、足はとんでもない方へ行くも じであって同じではない。自分では家へ帰ろ んづけたりする。つまり自分の足であって、 ころを蹴とばしたりする。靴がまた、其日、 のだ。機嫌のわるい時は、こころにもなく犬

#### まだ十五円でしたかなどとつりを (与呂志

らって困ってる人も再三見受ける。 尊い。但し、中にはアルミ貨五枚のつりをも 掌勤務もまた楽しい哉である。体験句は実に があるのは面白い。車掌さんははなはだ侮辱 て五円のつりを取る客。さまざまである。車 る客。何も知らずに乗る客。ていさいを言っ を感じたにちがいない。十五円をねらって乗 の乗客のうちには、こんなとりすましたお客 いまはもう取り残された観のある大阪市雷

#### 姿鮨人間むごいものを喰い

(紅 月)

「サア君やり給え」 まだ生きてるね」

「そこがうまいんだよ」 ナムアミダブツ、じゃあやろうか

いものでもない。この句は、「姿鮨」という 喰いなど。悪趣味ともいえぬが、そんなうま にちがいないが、食道楽も少し行き過ぎでは だ生きている。そこをぱくりとやるのは愉快 一語が利いているように思う。 ないかというのがこの句だが、同感である。 琵琶湖のヒガイ鍋。播州滝野のアユの踊り 生ま蝦は皮をむかれ庖丁を入れられてもま

#### 十円が戻るはがゆい赤電話

が分かるではないか。 理に作らなくても、どこでも転がっているの しろい句になっている。句というものは、無 電話というのは面白い機械だ。この句もおも 円は下の穴に戻っている。考えてみると、赤 いと諦らめて受話器をおくと確実に入れた十 赤電話はなにも語ってはくれない。仕方がな か出てこない。そんな筈はないがと思っても けるとこんどは信号だけで、留守になったの はなし中。またはなし中。しばらくして掛 千里



#### 雑 詠 だらだら坂朱塗りの橋も町の味 午後零時真昼の夢の山と川 左手は生駒連山朝の窓 力足らぬ同情だから見ずにおく 麻 生 葭 乃

#### 新幹線早くも走り疲れたか

分

国鉄自慢の新幹線も、この頃は時々延着する。まだ路盤が固まっていないせいもあるがあるらしい。台風も容赦なく痛めつける。このところご難つづきらしいが国際的にもぜひのところご難つづきらしいが国際的にもぜひのところご難つづきらしいが国際的にもぜひのところご難つづきらしいが国際的にもぜひいます。

### おやこんなところに秋の花が咲き

めに、一寸通りを外れた小径に這入ってみるあるき馴れた郊外の道だが、頭を冷やすた(淡 舟)

こんな散文を、みじかい十七字で、しかもいうのに、萩ともつかぬ小さな花が、もうそらそろ冷たい風がそここと吹いているのに、ちそろ冷たい風がそことと、名も知らぬ花が咲いている。いまは秋とと、名も知らぬ花が咲いている。いまは秋と

こんな散文を、みじかい十七字で、しかもと言葉ともつかぬ独り言が、そのまま句になっていて、もうとっくの昔にこんな句にお目っていて、もうとっくの昔にこんな句にお目にかかっているような気がするのだが、思い出せない。

#### 口癖の通りに酒で死にはつた

(鉄 児)

22

一読、こっけいな感じをもったが、おもしろいではないか。今朝の新聞をみると、胃がったが、それとこれとを比較すると、大分ひらきがある。この句の人も酒好きで、大方胃がっかもしれないが、「おれは酒で死ぬんだが

ゆ

SII]

達

義

雄

也

あ

特

集





#### 笑い言葉

北川春からができ

ッツノパー」 「ノミやシラミはめったに笑わぬ、テケレ「ノミやシラミはめったに笑わぬ、テケレ

という喋り出しで、確か金語楼だったかのラ

オ放送があった。

これも漫才か落語で聞いたと思うのだが、 これも漫才か落語で聞いたと思うのでがなわれるとのことだ。つまり、人間は「ハヒフへホ」で笑うというのである。集めた句を見るとこの「ハ行」の上に「ア行」が加わってい

が付いていた。「川柳雑誌」の昭和三十年一という句であった。「豆秋還暦」という前書

笑い声はよく出て来る。それは当然であろう

ところが、笑い声を取り入れた「川柳」は

われている。従ってわれわれの会話の中にもほとんど笑わぬ。笑うのは人間の特権だとい

ノミやシラミだけではなく、一般の動物は

たが、これが案外に少ないのである。もっとある「川柳雑誌」などをパラパラと調べてみどうだろうかと、急いでではあるが、手許に

許しを願いたい。
時間をかけて調べれば、まだまだあるには違時間をかけて調べれば、まだまだあるには違

**3** 

んなの暮 しが明るくなる セキスイのプラスチックス

積水化学

巣

アプレの娘カンラカンラと笑いそう「あ」が加わっている。豪傑笑いとでもいうは、よく「カンラカンラ」と笑っているが、は、よく「カンラカンラ」と笑っているが、これは日常の会話には出て来ない。

(恒雄)

と思うのである。 という句もあったが、これは豪傑武士から類 推して「アプレ娘」の様子が真に迫っている

### ハツハツハ お金の仲仕だなと思い

ここでまた これは「自己嫌悪」の笑いといえようか。

# 知つてるかあははと手品やめにする

3 という有名な句があるのを思い出した。いか にも自然の会話がはいっていて面白い句であ

カラ」というのもある。「ハ行」ではないが 豪傑笑いに「カンラカンラ」でなく「カラ

## 妙なとこでからから笑う坊主なり

抜けた所があるという句である。 お坊さんの豪傑笑いであるが、何となく間の

#### カラカラと笑える女史に子がなくて (代仕男)

方」が一番むずかしいような気がする。姿の り」が描けていると思う。 豪傑女史の、心の淋しさを隠す「カラ威張 テレビなどを見ていても、俳優の「笑い

> 見えないラジオでは特にそうである。 ある。句には いがあり、「フフン」という鼻先きの笑いも なかった。「フ」は「ウッフッフ」という笑 すがに日常語を使う川柳には、これは見当ら 鬼婆や魔法使いなどが笑う笑いであるが、さ 次は「ヒ」である。「イッヒッヒ」などと

#### 極楽なんてフフンと笑う十世代

るまいか。

ある。 ということだろう。人を小馬鹿にした光景で 現がギコチないが、 というのがあった。 「十世代」はちょっと表 「ティーンエイジャー」 (太希志)

これも句には見当らなかった。ただし「徳和 歌後万載集」という狂歌の本の巻十三に 「へ」は「えへへへ」という笑いであるが

りければ」と前書があって らうあまりに、<廻文の歌よめ>といひた 「ある人の放屁しけるを、かたえの人わ

# 

(加保茶元成

ほどに驚いた次第である。 の「へ」との掛け言葉であるが、その頓智の という歌が載っている。笑いの「へ」と放屁

> 教養がオホホと だけより笑わない 最後の「ホ」は「おホホホ」という笑いで

の言葉」を取り入れてみるのも一趣向ではあ ることができると思うので、川柳にも「笑い 性格なども分かり、場面などもかなり描写す という句が見付かった。 ともかく笑い声によって、その人の性別、





#### 試作品として長男に生れ

大阪府

111

村

好

郎

# 松茸が届いて何も言うて来ず大阪市正本水客

句の底に流れる有るか無きかのユーモアが好きだ。始と或る人が言ってきた。

### 岡山県直原七面山

盗人の逃げた窓から年が明け

のとした新しい年の陽の光りが希望に燃えて。窓から光りがさし込んで来るではありませんか。ほのぼ窓から光りがさし込んで来るではありませんか。ほのぼった場所に盗人。盗人の逃げた窓辺に寄ってみればその

### 新居浜市 安 藤 桂 仙

くっついていた。その内係長は左遷された。学歴もない成り上りの係長に鼻つまみの取り巻連中が

落ちる葉と知らずみの虫ぶら下り

#### 胃袋へ落附かぬうち請求書

大阪市

菊

沢

小

松

景

古きよき時代の実感の句、初めて自分の金ですき焼屋 工円何がし、びっくり仰天、散々の体で帰ったのを覚え 五円何がし、びっくり仰天、散々の体で帰ったのを覚え 五円何がし、びっくり仰天、散々の体で帰ったのを覚え ないます。何しろ鰻丼が三十銭、市電五銭の時代でし ないようになったので鱈腹食って出された勘定書が ないます。何しろ鰻丼が三十銭、市電五銭の時代でし

# 家計簿をきっちりつけて〆めとらず 堺 市 吉 田 圭 井 ヴ

替金覚え書が目的らしい。

#### 倉敷市 野 田 素 身

郎

### 自己紹介してみりや代理ばかりなり

己紹介してみると……。 己紹介してみると……。

### カナヅチも泳いだ顔で帰って来

富田林市

藤

岡

花

梢

これは私です。

#### 品 同

#### 養子会つくる話もそれっきり

八尾市

西

尾

栞

そこでその助教授が曰く「一寸待ってくれ、副会長にな 教授養子会の会長にいただきたいね。 受話器をとってダイヤルを廻したということさ、この助 ってもよいか、どうか電話で家内にきいてみるから」と の助教授の一人が、その恐妻会の副会長に推薦された。 或るパーティで「恐妻会」をつくる話が出て、その中

大阪市 酒 田 清

子

録音へ着替までしてかしこまり

待ってやと着替して正座するほほえましい一駒。 八十一才で尚健在な母、声をテープに取る孫達へ一寸

あと味の悪るさ儲かり過ぎていた 芦屋市 唐 専 翁

自体が句その儘のユーモラス。 (あと味) への凡句が天の天で不朽洞賞杯受けた。それ 戦後自製残品が意外の値で売れた時の気持を川雑句会

福岡県 太 田 湖 平.

#### 久びさへ不足料金払わされ

切手不足とて貰わずに居れませぬ友の文

### 九人みな育ち何よりの新春とする

出雲市

尼

緑

之

助

れている。近頃の夫婦には一人か二人しか子が出来ない 女4、結婚したのは4で、後5がこの必要に追いあげら 18、これは今年の我が子の年令を示したもので、男5昭和三十八年の作、34・32・31・28・26・24・23・21 いるのもおかしい。 不思議である。そして一人や二人の子供に非鳴をあげて

ハワイ 築 Ш 快 起

### 日曜大工隣りの子まで邪魔に来る

かると、孫の奴のお手伝いはいいとして、隣家の坊さん まで来てまぜ返すのは閉口。 折角の日曜なので鋸やハンマーを持ち出して仕事にか

京都市 大 鶴 喜 由

#### パイプより短い距離に女寄り

とはしとやかさが一ぺんに大胆になるものである。 気が乱れてくる。これが二尺も離れては効果が薄い。女 女は何かをおねだりしている。男はその匂いと感触に

大阪市 米 虫 乃

字

### 社長から貰った犬で捨てられず

んを無理に貰わせられたら大変な事になります。 犬だったからまだ幸せでした。これが恋人以外の娘さ

#### 同

#### 無雑作に首を握ってかしわにし 大阪府 清

水

白

柳

たらかしわになったのである。 五文字である。無雑作に首を握ってどうなるのかと思っ 非常に惨酷なことなのだが、それをカバーしたのが下

大阪市 西 出 栄

#### 逢引へ鈴を落して猫戻り

ブシーンを演じてきたらしい。 を落したまま涼しい顔で戻ってきた。どうやら猛烈なラ 思春期の三毛と隣りのクロと目下恋愛中。ある夜、鈴

目尻さげすぎて寿司まで奢らされ 高槻市 白 溪子

過るとかえってつけ込まれることになる。 して好い恰好をしたがるものである。あまり目尻をさげ 平素むつかしい男でも、ひとたび酔が回ると女性に対

室戸市 奴 田 原 紅 

# 貧乏神夫婦喧嘩を見て通り

ば犬も喰わない夫婦喧嘩は心得ている筈である。 刻な気持のもち合せはない。貧乏神にしても一夜明けれ 貧乏神を冷やかすには夫婦喧嘩に限る。 唐紙の穴に詩を覗いても、貧乏神が腰を据えるほど深

#### 豊中市 田 古

方

### 世話好きの師走ドブ板ふみはずし

と思いまして。 ったので、どうにかユーモアの句の仲間入りができるか 路郎先生に褒められ、抜けた時みなさんに笑ってもら 水

今治市 越

# アベックが来てアベックが去るベンチ

くれた写生句。 いたとき、ああ美くしき青春の姿よ、と胸をおどらせて ある晴れた日の午後であったが、吹上公園を散歩して

大阪市 室 谷 鉄 舟

#### ボストンが先に席とる一人旅

ら有効なボストンの使い方を!! い荷物一つ?のける勇気もない僕は教えられた、それか 野戦生活八年、世情に暗い僕、空席へ飛込むと主のな

姫路市 岐 不

酔

# アホあほと言うな俺かてかぜをひく

書いた此の句。 アアうれし俺も賢いんだなア。遂に浮んだ此の句、遂に しくてならんと思う矢先?アアうれし風邪ひいた。俺が 皆んなから、お前が風邪ひくかいと言われ通し、 くや

#### ゆーもあ特集

#### 肝心の土産が着かぬ発車ベル

大阪市

後

藤

梅

志

ていたが、寸前駈付けた汗みずくの顔から土産物を受取ていたが、寸前駈付けた汗みずくの顔から土産物を受取るせつなに特急発車。

#### 岡山市 江 国 幽

谷

親子してする宿題へ子の欠伸

は運転士になるのになア」
昔から茄子の木には茄子がなると云われている。親の

大阪市 水 谷 竹 荘

### 湯の宿の楽しみ混浴ともいえず

が多いのはナンセンス。を見られるのが楽しみだが、若い女が少くておばあさんを見られるのが楽しみだが、若い女が少くておばあさん

ハワイ 羽 佐 間 柳 葉

#### 才能がないとは言わず運がない

人間誰でも大か小自惚のない者はあるまい。Aさんはで生字引と云う渾名のある昇進望み薄と云う平社員である。処で本人にして見れば会社は俺の才能を認めない、俺は全く運がないと歎く。

# 本宅でもませ妾宅でもんでやり

柳

志

ユーモアやウイットには説明は蛇足である。説明の要る「陛下あの山が阿蘇でございます」「あ・そ」秀れたてもませ姜宅てもんてやり

のは駄じゃれと知るべし。

静

馬

#### 看板屋原稿どおり間違える

書を引いて見たらやっぱり当て字だった。それにしても表を引いて見たらやっぱり当て字だった。それにしてもスラッと読み下した看板だったが、気になったので辞

山口県長野井

#### 銀行は何するとこと子に訊かれ

って縁のない銀行を説明するのに一苦労した。て借りるには信用がない、自分等のような零細庶民にとて観行って何するとこ?」預けるに金はなし、といっ

諫早市 川 岡 霊 眼

#### よく見れば鼻真中に自が顔

神秘と云うにつきる。
置は面の配置属の王様でもある。それでいて同じ顔といる人間なのの配置属の王様でもある。それでいて同じ顔とい置は面の配置属の王様でもある。それでいて同じ顔といる。位

ちんばでも

用をたしてる 宿の下駄

#### 口ひげの生えて来そうな女史であり 大阪市

JII

呵

茶

来そうなり。 の女が多いからだんだん男性化して今に口ひげも生えて 所謂女子タイプと云うのがある。中年以後殊にM過剰

高槻市 山 田 季 替

出され、思うがままに始未して、履いて出ると、此の句 のようなことになる。 揃えれば一足になるかもしれぬが、誰かれなしに持ち

こりやうまいとうっかり言った酒の肴 富田林市 浅 ][[ 郎

ければいかんし.....。 その都度出され、実は余りすきではないのだが、食べな 初めて招待された先で、思わず「こりゃうまい」が、

清 水

保

鳥取県

#### 割勘と知らず恐縮してよばれ

が後の祭り。 たつもりが後で割勘の請求書にびっくり、口惜しがった 珍しくも友人の御馳走と恐縮し、辞を低くしてよばれ

#### 老妻とじゃんけんぽんで肩を揉み 岡山市 服 部 + 九 平

う、そこでじゃんけん。 滋女肩を揉めと命ずると「十九平さん揉んで頂戴」とい "十九平さん御飯ですよと妻が呼ぶ"の老妻である、

大阪市 福 井 野 迷 路

#### 神前で千円札をひっこめる

です。路郎先生からおもろいなと言って頂きました。 の業を眺めて側面からゲラゲラ笑って居るフィクショ 神聖なる神前でも仲々消えない見栄と物欲と言う人間

東京都 石 居 高 志

### 税務署が来てると紙に書いて見せ

くメモに走り書き。客も相身互い心得たもので「ここん とこ儲け話おまへんなァ 税務署員の前で迂濶に裏取引の話が出ては大変、素早

児島市 伊 丹 阿 喜 喜

良

#### 断水へ小便小僧考える

くなったのかと不思議そうに考え込んでいるのである。 ある。可愛いいおちんちんをつまんだまんま、ナゼ出な 断水したので小便小僧さん、小便が出なくなったので

#### 同人作品

#### 下痢をしながら枝豆の礼を云い

岸和田市

内

藤

き

3

子

云われたとか、ごもっともです。

或日或時の私の実感です。短冊向きでないと或る先生が
女の句として、ちょっとオゲレツかも知れませんが、

金の無いのが払います払います 仲 どんたく

しますまい。
というな事は致いの悲しさです。大阪商人ならば決してさような事は致いの悲しさです。大阪商人ならば決してさような事は致します。

先代も若い時はと祖母かばい 大阪市 川 口 弘 生

振りです。(昭36) だい時の事を暴露しかねない、おばあちゃんの干両役者 でくなった先代の事ならいいのですが、現在の当主の

諫早市 島 田 破 竹

#### 同じ禿ながらも社長艶をもち

で見ると宴会招待など美酒美食の社長とは同じ禿にも艶く見ると宴会招待など美酒美食の社長とは同じ禿にも艶の差があった。

# ひんから酔うたのがさばり 岡山県 浜 田 久 米

雄

# 電柱へしんから酔うたのがさばり

大阪市 大 坂 形 水れにしても昔の酒はよかったなぁ。

### 赤ちゃんのシッコが飛んだ初笑い

かなこと。―吾が家の正月風景―。(一昨年のこと)ていた娘達まで、お湯をする盥の囲りへ集ってきて賑や元日とて赤ちゃんのお湯は欠かせない。トランプをして、1050年の100円である。

奈良県 草 深 酔 升

#### 三味線が音痴の前に来て座り

で「助けてくれ」と言いたくなる。で「助けてくれ」と言いたくなって冷汗が出て来そうで「助けてくれ」と言いれると青くなって冷汗が出て来そうで

大阪市小林トメ子

#### 新妻は猫よりくらい下にあり

てやる始末、それに嫁の私にはうどんだった。入で嫁より扱いはよく。猫名前で積立で米も一年分買っ二十年前の事だが私が家に来た当時、猫は姑のお気に

朕富めり電化製品ゆきわたり

#### 同

#### コップ酒口とんがらせとんがらせ 岡山県 本 田 恵

朗

して楽しいものだ。 酒好きの生態を観察していると愉快干万な状景に出くわ 私は酒量は至って少ないが酒のムードは好きである。

堺 市 高 崎 雄 吉

アンテナ、どの家も電化製品が充ち溢れているので、こ のように仰言るのではないか。 今、もし仁徳天皇が御覧になれば、見渡す限りテレビ

島根県 中 11 晃 男

# 元気かいボクも元気だ元気でネ

尽きるようなのが多い。さあ今年も体を大切に命ある句 を作ろう。元気でネ。 大ていの手紙殊に若い人のなどせんじ詰めればこれに

捨丸の鼓へへその垢がよれ 岡山県 大 森 娯 句 楽

#### 興を求め、浮世の憂さを忘れさせて呉れる古典的捨丸の 老い行く先を案じさせながら聞かせる笑い。 慌ぶこの年の瀬も越えると一陽来福の三カ日を万才に

#### 白痴忙しそうに飯を食い

玉島市

E

井

林

坊

詠う事かも知れぬ。 通り過ぎて哀れさがこみあげる、 別に急ぐ用の無い白痴。 純心無垢の顔にはユーモアを 結局川柳とは悲しみを

兵庫県 河 原 3 0 3

#### 社務所の鶏はアルミ貨もて余し

掃きよせて鶏に選別させたので、 神様もそっぱ向いて。 課題「賽銭」農村には撒米を供える風習が今尚あり、 猫に小判ならぬ珍風景

加賀市 梅 田 久

# ラッシュを妻のヒップで無事に乗り

プで押し進む妻の後より乗車せし、 公徳心零まずは小男の初夢と呵々。 戦車の後を行く兵の如く、ラッシュの波を巨大なヒッ 亭主修身復活の折、

平田市 家 代 仕 男

# 金策に出るとは見えぬオートバイ

いい音響は、まさか金策に出て行く人とは思えなかった のである。 皮ジャンパーに皮手袋、奥さんに送られて単車の威勢

雄

#### 猫 の恋油煙をつけて戻って来

高槻市

若

柳

潮

花

にも疲れが見える あいまから忍び足よろしく戻って来た。とぼけたその顔 猫の朝帰り、何処で寝たのか、真黒に汚れた体を戸の

大阪市 石 倉 旅 風

孝行はせずに出世をしてしまい らない。句の説明より先に私自身の人間性に勉強の余地 今更ながらユーモアの句、どう贔屓目に選んでも見当

広島市 弘 津 柳 慶

### うかつにも妻のパーマを今知って

限り無しと言うべきか。

もかけたくなる、「パーマかけたのか」これでは晩酌も 迎えるが、しらぬ顔の半べい「どうこの髪の型」とナゾ につく。たまにパーマでもかけて、おやじ殿を玄関に出 へらされるわけだ。 二十年も毎日顔をつき合していると、妻もそろそろ鼻

堺 市 Ш 中 狂

#### 結末を聞かず女房ふくれ出し

思わず頻笑んだ句。今さら説明なんて野慕な事を。 苦虫を嚙んだ顔をして作句、ペンを置いて一読をして

#### 親子だと云うのに女将なぜ笑う 八 木 摩

市

天

郎

い親子、妻で無い妻、二人妻、兎角おかみの眼はすごい 温泉場風景……旅行ブームの昨今に便乗して、あやし ハワイ 古 JII 魔 花 麗

### お隣りも嘘をついている十二月

ア。 ばかりではない、深刻な世相の中に流れる一脈のユーモ お隣りもうまくやっているらしいぜ、嘘つくのはうち

布哇ホノルル市 市 岡 暁 舟

## 帰化講座どころか今日は文化の日

し、領事館へ飛んで行った「日本国万才」三唱でもして 取ってはいるが今日は思い出深い明治節講座なんか後回 来よう。 米国へ帰化でもしょうかなと、嫌々ながら準備講座を

竹原市 Ш 内 静

水

## だれも手を出さぬお菓子の蝿を追い

ぶさたな手が蠅を追う、伺った用件すら切り出せずじま いげに善人の哀れなり。 両刀使いを自認する悪友の面々も畏った切り、手持ち

うちの人しぶちんだんネと寄附ちびり

#### ゆ

### うるさいな何の用かと居留守が出

加賀市

那

谷

光

郎

て重い腰を上げた。実感。 自由、折々留守居拝命、うるさいなは心の中、根負けし ユーモアとして適当でないが、これしかない。脚が不

#### 大阪市 九 章 雅

奥さん強制的な物ではありません有難う」外へ出て一同 先手打たれた 「宅がアレですから私の計らいで些少ですが」「否々

熊本県 有 働 芳 仙

焼け肥りの店へお客を奪られそう

#### 屋さんだったのに、あたしもここで買物すまそうかしら !あの店に悪いけど。 「まあ!綺麗になったわねえ!焼ける前は小さな八百

#### チンに似た顔もパーマをかけに来る 新居浜市 林 孝

Œ

を感じさせられます。 見たは第三者、当人は真剣、と思うとそこに笑えぬ笑い 女性に生れ美を希うは不美人とて同じ、 チンに似たと

#### 青森市 I 藤 甲

#### カミソリを放せば動くのど仏

かしいと思うのですが。 くしてカミソリが放れる。ぐっとツバのむ。おもしろお ひげをそらせている。鼻だけで呼吸している。 しばら

#### ぼつこうの連発ぼつこうツバが飛び 岡山県 Ш

構

声

はいって居るので盛んにツバがとんで居る。 す」を強く言った意味です。ぼっこうをつかう話は力が 「ばっこうおえん」は岡山の放言です「大へん駄目で

#### 呉 市 林 甦 光

# 禿げたのが出て来てギター慌てたり

と正に梯子、そしてこんな事になる、実に愉快な不良老 普段は誠に静かな爺いさんだが一口召上ると次から次

#### 広島県 原

鳩

# はだか見たほうがあわてた目のやりば

であった。ニキビ時代のホロニガイ思い出。 たとたん「キャッ」「ワッ」それはお姉ちゃやんの行水 真夏の午下り、隣りの井戸水をもらいに勝手口を開け

#### 品

## 仕事着で歩けば犬に吠えつかれ

大阪市

市

場

没

食

子

出たら、そこらの飼犬に吠えられ驚かされた、犬も服装 で人を小馬鹿にする。 会社の着古したジャンパーとチビタ突っかけで昼飯に

京都市 松 ][ 杜 的

叱られた分だけ餞別ちびっとき

に餞別の回覧が廻って来た。思案したあげく件のように 相成った次第。 鬼のような上役にも定年の時が来た。おきまりのよう

何もせんのが一番ようぼやき 大阪市 西 田 柳 宏 子

い……こんなことを云うだけ自分も古い殻をつけている 批判する……その反面自分のほうは仲々気軽には動き難 ことは筋が通っているように見えて、他人のことはよく 多くなっている。浅く広く知識的に拡がって、一応言う 現代の一つの傾向に、若い人達の小言幸兵衙的なのが

新居浜市 近 藤 凡 生.

## 待ちぼうけ蛙の声も腹が立ち

故、産業災害の遠因となる。用心!!用心!! 恋然り、何事によらず、待ち呆うけの苛立ちは交通事

## 靴下と同じ強さに喩えられ

大阪市

中

JII

滋

雀

ですが、たまたま強くなった靴下との名コンビはとかく 話題にのぼります。 靴下と一緒にされたのでは、世の女性から叱られそう

ポリスボックスで酔いざめの水をのみ

奈良市

宮

笛

生

てホームから転落。駅員は飛込みと思い派出所へ連絡、 十五年程前の歳越しの夜の出来事。S駅で酔いつぶれ

倉吉市 奥 谷 弘 朗

派出所での一コマ。一生一代の不覚。

# ウインドの見本通りに着こなせず

ら」で、無理矢理に買ってもらった着物でしたがねー。 当然ですよ……。 なことになりました。勿論、貴女に何の罪もないことは 残念乍らウインドの人形は、八頭身でしたのでね、こん まああの柄、いいわね」「マア本当、私にどうかし

大阪府 松 田 \* 月

ブラスバンド文化文化で眠られず

だんだん忘れられ、赤いシャツ男か女かわかんない。 へなへなのツイストなんか見てられず、戦前のよさは

# お寺さんスイスイスイと奥へ行き

大阪府

西

わ

を

して乗付けお経を上げに来る坊さん。恰も此の家の一人 でもある如く気易く入って行く一駒。 先祖の祥月命日には必ず檀那寺からスクーターを飛ば

大阪市 河 井 庸 佑

### エプロンの下 盛装のPTA

…。よく見られる光景です。 ください。」こうした声がよく聞かれる。その結果は… 学校の集会で「エプロンがけでお気軽に学校へおいで

大阪市 宮 尾 あ U き

## ランデブー蛙の方が声をのみ

なランデブー、恋をしていた蛙の方があわてて声をのむ いじらしさ。 月影にも気兼した昔のランデブーに競べ、現代の派手

加賀市 細 呂 木 魯 木

# 金貸しの葬式あの人も借りたらし

は免れないだろうに。 親戚でもない意外な人の顔、顔、お詣りしても返済義務 某日金貸し婆さんの告別式に参列している人々の中に

## 金 井

文

秋

これ着かえなはれがボタン取れたまま

どこか一本釘が抜けている。 きするのかもしれない。 汚れものを着せておかない心使はよい世話女房だが、 これだから女房稼業も長続

堺 市 城

舟

# 生きてれば食えぬ果物供えられ

と、食うてはならぬ物ばかり、これでよかったのだ。俺 はこの世に毒を遺さず死ねそうだ。 労働が尊い物と働き抜いた。気がつけばガンだ血圧だ

大阪市 天 IE. 千さ子改め 梢

# チップまで出してもらって二日酔い

らった想像の句です。 い、たまたま上役から、ろれつのまわらぬ程のましても 百円亭主では到底チップの必要とするお座敷へ縁がな

出雲市 原

独 仙

風船の破れに等し老妻の乳房 場合この部分に限り空気を保っている。では句の主は? 女六十ともなれば総ての機能が衰えるのだが、女房の

内緒!隣りのお婆ちゃん。

## 気のきかん骨 法衣着た喉に立ち

京都府

西

村

句

楽

坊

げ、気を付けんか阿呆やなー 丈夫心配すな。其のとたん、立った-抜いた骨つまみ上 廻向がすんで、どうぞ一口、骨に気を付けて、ナニ大

布施市 本 3 清 人

たこ焼の味がええしにわかるまい

## 生の次女が「私の組でたて焼買うとママに叱られる子が いる」と言ったのでピンと作った句である。 或る晩勤め帰りに少しばかり買って帰ると、小学二年

腹の児へハリバホルモンそれ卵 姬路市 小 畑 自 由 朗

中の固りへあわてました。 り、のどを通らぬと云うのに、 三十数年前、女房が始めてはらんで、梅干のお茶漬よ 私は女房の躰より、 腹の

大阪府 笠 原 吸 江.

## 腹の子が結論を出す二人仲

中には未だこんなこともあろうかと思い、ある句会での 出来た以上は仕方ない二人は目度たし目度たし、世の

## 下手な散髪中止も出来ず

高槻市

福

田

T

路

張ったものである。 たところ、その痛さ、と云って中止もならず涙ながら頑 終戦まもなく散髪器具を入手し、家内に刈ってもらっ

マイカーの後から月賦屋追いかける 守口市 羽 原

静

步

想像してみました。 びました。秋晴れの道をフルスピードで追って行く姿を 月賦にはよわい私です、そんな私にふとこの句が浮

富田林市 吉 岡

美

房

いい話ハンドバッグを抱きしめる

ある。 句、新入女子職員の新鮮な若い仕草に思わず出来た句で ユーモアのある句と云えるかどうか、私の好きな句

手のひらへ金を集めた飲み仲間 大阪市 不二 田

> Ξ 夫

だが、一滴も飲めないぼくに、案外こうした酒の句が多 川雑四百号記念川柳大会で堀口塊人先生選の天位の句

37

# 川柳点における軽妙洒脱

# 阿 達 義 雄

近代人は稍々もすると、深刻な諷刺句や複近代の眼を以て、川柳を評価しょうとするかがな人情句を秀逸と考え勝ちである。これは

然し、江戸の川柳発生期において、柄井川然し、江戸の川柳発生期において、 柄井川

出した句のことである。 出した句のことである。

れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟書の取次いだ高番句が政策的に巻頭に据えら連の取次いだ高番句が政策的に巻頭に据えら連の取次いだ高番句が政策的に巻頭に据えら連の取次いだ高番句が政策的に巻頭に基えられており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、柄井川柳が毎会どの句を最優秀吟れており、

村井川柳に再三勝句とされ、更に『柳多昭井川柳に再三勝句とされ、更に『柳多田』にも重選されているばかりでなく 「大だ、中には、殆ど同じ句でありながら、 ただ、中には、殆ど同じ句でありながら、 にだ、中には、殆ど同じ句でありながら、 としたかは不いる句があり、この様に 大回も採択されている句があり、この様に を大回も採択されている句が可なり多く、これら の句を通覧してみると、痛烈な諷刺句は殆ど 見られず、寧ろ軽みの勝った句が多い。 見られず、寧ろ軽みの勝った句が多い。

であろう。

川柳評万句合の〔宝暦十一義2〕〔宝暦十

は、先ず一流選者に嘉賞された句と言われる留』にも『柳樽拾遺』にも収録されている句

としては、
「柳樽拾遺」の第八下などに採られている句
「柳樽拾遺」の第八下などに採られている句

八上のいずれにも採られている句には、多留」の〔初41〕〔一四17〕、『柳樽拾遺』第 というのがあり、川柳評万句合の〔宝暦十二というのがあり、川柳評万句合の〔宝暦十二というのがあり、川柳評万句合の〔宝暦十二

団扇では憎らしい程叩かれず 田扇では憎らしい程叩かれず というのが見られる。恐らく、これらは屢々というのが見られる。恐らく、これらは屢々というのが見られる。恐らく、これらは屢々というのが見られる。恐らく、これらは屢々というのが見られる。恐らく、これらは屢々というのが見られる。恐らく、これらは屢々というのが見られる。

尤も、「団扇」の句には、「憎らしい程」

## 本誌の投句には

なるべくご利用ください

特川柳雑誌

笺

送料 二十円

あり、安永二年刊『武玉川』十七篇には、「叩の代りに「思ふやうには」となっている句も

きたい程」となっている。 元録十四年の 『替独楽』に、 叉 この句の原形

詠まれたに過ぎなかった。 を見ても分るように、未だ器物の属性として とあったことも知られているが、これは前句 団では思ふやうには叩かれず ぬらりくらりとぬらりくらりと

媚態を詠んだ句である。 いる。又、「抱いた子に」の句も若い女性の 夏の宵の若い男女の痴態を詠んだ句になって すれく」などとなっているから、明らかに すれく」「りきみ社すれ 然るに、この句の川柳評の前句は「笑ひ社 く」「ならひ社

の心情をその儘、その姿態として流露させた ではないが、何処にも見られる様な、 l然的な軽妙な句である。 これらの句には、別に深い意味があるわけ 若い娘

の第十八に重選されている句に、 して推していたのではあるまいか。 柳多留』の〔三41〕 川柳点では、案外にこのような句を佳句と 川柳評万句合の 四2)、 〔明和二義4〕 「柳樽拾遺

特別の意味のあるわけではない。だが、お七 という句がある。 のわきかき~お七そばへ寄り 「耳のわきを搔く」動作に

> 埋める間が全く空白であってはいけない。何 が恋人の吉三に接近するまでの空間と時間を きが自然的至芸として感じられる。 でもない動作ではあるが、 この細かい指の 動

たものかも知れないが、川柳点でなくては描 出されない妙味であろう。 この軽妙さは、舞台上の名優の演技を写し

そそぐ陽光と青空を見ては誰しも感ずる気持 なる感懐が軽く詠み出されている。 露されている。これには貪欲などとは全く異 であり、それが何の技巧もなく、そのまま吐 欲望を詠んだものであるが、サンイへと降り 軽みは金銭を詠んだ句にも見られる。 右は若い女性の媚態にみる軽妙さである。 うらゝかさしきりに銭がほしくなり 例えば

柳多留』の〔一七・40〕 [四五・32] 31) などに採られている。 この句は、 川柳評の (天明二・三・二七)

じられる軽みの句も含んでいるのも当然であ る句を眺めてみよう。中には音律の上から感 ともないような所に、 わらない淡白・軽妙・洒脱の句を拾って、何 三採られている句ではないが、余り物にこだ 以下は、必ずしも、川柳評や『柳多留』に再 何とも言えない味のあ

> に特に多く見られるようである。 のではなかろうか。 情の真実を他意なく卒直に写す処から生れる 句の軽妙さは、一つには、人間の姿態や人 この種の句は宝 層期の

丸薬を貴ふ室頁よう。 (宝十三礼3)小児医者がら~などをふつて見せ(宝十三礼1) 壁訴訟ひげを抜き~~聞いて居る(宝十三松4) 丸薬を貰ふ座頭はちゞこまり 前垂れをふきく内儀あいさつし (初・24)

女湯 男の子裸にするとつかまらず 女房へ乳だ~~と押ッつける へ起きたくと抱いて来る Ξ 18 ∃ 35

うたゝねの顔へ一冊屋根にふき 五 · 11 2

仲人へ暦を投げて身をかくし おさへれば薄はなせばきりぎり 五 24

九·梅

て見せるという程のものでもない。 諷刺性が少なく、世相・人心の裏を深く穿っ これ等には写生を主としているものが多く 母親のえくぼ突き (宝十一・智2)

ろう。 距離から余裕を以て眺められているからであれるのは、事象が客観的に写し出され、或る それにも拘らず、何となく可笑味の感じら 伊石石石石井池阿阿安阿天尼安麻浅浅青青丹坂倉川居井阪田部形藤万見緑次生野川山木阿南新旅流高夏天古柳一桂万幸之弘下,那郎助屋 皇雪風洞志生紅心太杉仙的雄助道下郎郎助星

日牛宇魚上上植植和出岩岩今伊井磹伊伊市市 井島見住林田山村泉原田田西原上 藤藤場岡 三水彰満加翠武遊松直美併章明湧信茶泉食暁坊京大潮仙光助子風奇代吞雅林三重仏睦子舟

越奥奥置隠岡大大大大太太大大大江梅有内智村谷田岐島山森西鶴谷田田崎坂江国田働海一丹弘ふ不芳雅句八喜月良湖博形秋幽久芳敬水路朗じ酔道城築歩由都子平正水月谷雄仙太

川川川河河河川川河河唐賀亀神金笠小小小小端口村村村原竹岡井相崎本山谷井原沢川川浜東弘好瑞日の松霊庸 す 専 晴九文吸央恒観 牧 集 郎川満る風子佑む翁昇峰郎秋江葉明堂人

川柳塔社

同

—五十音順—

工 葛 桑 黒 蔵 久 国 草 木 木 木 木 木 木 木 木 木 木 木 木 木 橋 北 北 黄 岸 菊 木 菊 神 梶 冠 藤 木 原 川 本 米 弘 深 山 山 村 村 村 村 村 村 村 間 川 村 瀬 沢 口 田 原 谷 甲 亭 喜 紫 梅 良 半 酔 二 遠 十 涼 平 千 匡 孤 薫 春 三 美 南 松 賀 さ 兄 生 朗 吉 郎 風 香 子 子 休 升 路 二 悟 人 郎 容 利 浪 風 巣 歩 秋 柳 園 峰 む 兄 生 朗

渋城下清清清島島直佐佐佐桜坂酒酒小小小児近小小小小高小谷 山水水水田居原野野木川田田井林林林島藤松西西谷津池 三一清望白一破百亩白ト福不東清か四メメを日、養雄無仙徹げ時舟潮峰柳保竹酒山水占郎水男子平二子正志生雄々鬼山也お

い」いのちある句」を作れる路傍の石でも句にできるははっきり焦点つかむことに人間陶冶の短詩なりほ没になっても悲観すなへ下手の長考気にするなと年寄だけのものでなしち知恵と根気と作句熱力を記さけ川神過去のものわ忘れと一句に辞書がありか肩のこらない口語体よ読めない当学は書かめことなおどけ川神過去のものわられいールに乗ればしめたものを創作してこそ意義がありつ努めて句会に出席し

川柳いろはかるた

傍 島 静 馬

西西西西西新永永長永柳那中中中中中中中中内戸友富都戸遠 辻岡尾尾 岡松藤野尾楽谷島島川川村村塚ど藤田淵岡倉倉山 竹洛一 りつ 東弥井永鶴光生小滋晃ら古貴淡求普可 青酔路栞を子岸平蛙断丸郎庵石雀男を平石く子方山舟女天住

原原原林林林林早浜浜羽服長野野野野野野野野 奴西西西西西野 川田野原部川田田呂本村村口田原出田垣森村独峻千 甦昌夢葵清久奇静九三身一鵜吞岬味美野 紅一ヶ 錦花花魚仙郎里光男虹丘生雄童歩平司郎念汀水月平舟菜 雨栄子風村坊

室村村村水三宮宮宮満光間丸真松松松松松松松松松正前本本本井山田上谷輪口地尾田好島川鍋田本本塚下川岡江本川多多田八光瓢旭竹峰笛双あれた陽丹初一半古忠加力の浪里客字志人朗寸輪太童荘円生楽きし子子甫瓢月郎三代み的浪里客字志人朗

渡渡若若若米吉吉吉横山山柳八山山山山山山山 山山森森森森室 辺辺辺林柳本虫田原岡山田田生木上本本本根川內本田下川谷 独乱暁草潮久乃井紅美一季三柳天太立酔素白 阿静泉若愛み 歩坊童右花志字堂月房声贊男生郎郎児泉郎星茶水子人論れ舟

な何んでも句にするくせをつけ な何んでも句にするくせをつけ を変らない文字は省くこと の望みは大きく諦めず を老いを忘れる三昧境 く苦吟の中から佳句生る ややる気へ句想湧いてくる まマンネリズムを打開せよ け経費はほんのコーヒ代 ふ塞がる壁にくじけるな て天位獲っても自惚れな あブイデイアうまくつかむこと さ作意目立ては句が堕ちる ききっちり楷書で五十五 めユーモアあるれる句に気品 めメモにヒントを書き留めよ のカリ近に句材ありあまり し実感こもる句の強味 気得手を他人に取られまい ひ独りよがりは伸びられず を表明をまず自戒せよ を表明を記してる句の強味 を書きるもので表 の連れるので表 のまま句になるまでもり遂げよ を表得手を他人に取られまい ながになるまでわり遂げよ を表得手を他人に取られまい ながになるまでもりが重ちる のまま句にせかせよ を表得手を他人に取られまい ながになるまでもり遂げよ を表得手をでれて名句に気品

儿

尾

栞

選

松

江

梅

里

選

大阪市 吾 郷 玲

植木屋が枯らした松の捨てどころ

さて何を祝う日なのか文化の日 去年のはもうあきまへん市街地図 灯を消してほしい月夜の中の窓

修身を学びし父を学ばれず 断食で弱りましたと医者へ来る

サービスはただでなかつた請求書

色

ル

子

鉢巻に平和と書いて殺気立ち 目標は平和 叱られるコツも覚えて栄転し 子の入試お茶断つ母を笑えない

野

花に明け花に暮れてる仏さま もう五分待つて見る気のコンパクト

糸切歯腹立ちしのぶ役もあり

温室を出したつもりで子を送り

潮

見

タ

3

子の元気靴の弱さはなげくまい 節分の豆はかわらず世は変り 片想いなおさらつのる春の雨 趣味に遊ぶ今日放たれた小鳥めく

自由主義心のしんを見失い

夢

地球はいがみあ 大阪市 小

智恵子抄この世に愛の極み見る 愛憎にふんぎりつかぬ四十路なる 妻の日々扶養家族の汚名きて 姑まで男のかいしよ押しつける 本妻と云う屈辱に耐えて生き さんざんに待たせた人がバスに酔い 寝ておればよい老体が指図に来 香川県 Ξ 井 酔

朱

扇

適材が適所見つけて辞めて行き	長崎市	転はまかして二人分しやわか雨ごめんなさいと虹り花の明日を咲かせる水私共多忙冷たい便り来る	口軽く呆けるすべさえ堂に入り	竜野市	親だけが残つて風の中に立ち青い空病いの子には痛かろう	習りによりますこは沓ませまちているから一円が見逃され		が見るしてしるな	とりまきも逆至かいている客目 鉄格子豚恋もなく肥えるだけ	くの等りて気いのよい女は	口は言うが留任妨げず	倉敷市	女から言わせるにくいにくいひと	川いざこをりっぱりみどころのないのも	しみを首筋に見せ	猫が見逃がす泉水の濁りよう	郡山市
	甲			森			刀	(				水		T			中
	斐			下			粉	}				谷					内
	笊			峰			Ŧ	2				谷					孚
	柳			子			绿	25				水					彦
底味は樽で届いた故郷の味噌	羽曳野市 今	自然美へ余生ゆだねることに決め人間も生命も金で支配され人間も生命も金で支配されく問えど金にあたま下げ	兵庫県 芦	来賓の祝辞は胸の造花に似	婦の像妄想なきにあらざ味噌まで乾かす音よドラ	引住にいる気でおれと見舞客 羽曳野市 谷	ついてたのしい恋も	こだけは濁したくない	押し合つて乗れば座席がまだあまり非情にも人情家にも金がさせ	池	イクせわしい音で	さんの稼ぎわたしが追いまわ	言い足らなことがいつぱい別れ祭子を持つた苦労話が羨やまし	堀	富士五湖に住んで自慢をするうなぎ	手を抜いた建て売り文化の色でぬり	アリガタヤ節でパチンコ負け続け
	井		屋			垣				田				江			
	岳		みど			史				晴				芳			

好

子

太

り

宿題を見てよとパパはテストされ 岡山県 目	き初めの調子に乗せて春の唄	補聴器へ愛の囁きかんぐられ娘の恋を自然発火と見て不安	む膝へ菊をちぎつた子	2	寝顔どの	が で で で で で で で で で で で で で で で で で で で	里見泉へ兄司ひまざた 長も専務も油だらけで交をあたため過ぎたこんわりと口説かれのら	着飾つた女視線の延びどころ酔ざめの茶漬も酒の味なりきやンチャかも知れぬ悪阻の激し過ぎ
賀		Ŀ	房		富	宅	田	
芳	1	但	20		淀	紀	益	
				7	月	世美	雄	
月	3	<b></b>	1.		Л	天	/4t:	
新聞をあごで読んでる朝の膳	ぶされる蔵はなけれど	放送会給をくらべて常てつき世の不況知らず野良犬牝を追う十二月妻の寝顔のたよりなさ	鎌祝い町人などに判るまい	類に印鑑という児戯のられた子の眼にうるむ	独りつ子を鍵つ子にしてママ稼ぎ地獄耳を特ダネ記者にほじくられ描き黒子悪魔づくりの顔に凝る	第の母励ますようで叱るよう なっなの哀しさ歩るくだけ を恋へ女の哀しさ歩るくだけ	伝 を を を を を を を を を を を を を	もみじだ郵便受け
片い	大		平	鈴		花	岡女り	野
上	江		野	木		東	本	П
善	140		N/	村		千	da	卯
-	俊		光	諷		久	幸	之助

P	大阪市 西 本	ひようきんに言つて失意を繕ろいぬ 均一の愛で育てた子沢山	大上	マニキユアー塗つてお米をとぐ育ち 新調のパパ手を上げる水鉄砲	石川県 田 島	手当てがついて自重する	吸く希って奄っをまめてる人あり上 羽咋市 三 宅	驕慢な男に弱い待ちぼうけ			空からのビラ バーベキユー食いに来い			9		りながら		からみ合う手へトンボリの灯が流れからみ合う手へトンボリの灯が流れ	お互いにくらしがわかり角がとれ
4	呆		_		<b></b>		3			功			痴		水			秀	木
Ē	夫		光		=		亭			雄			亭		車			峰	土
せずについ	金の要る方は祝電打つておき	銀婚を子も知つていたプレゼント	倖せは電化にまさる妻を持ち	殴り込み思わすようなにわか雨	この雨は明日まで続く里帰えり	で口説きパト	一対一危険なムードに追い込まれっち	柿稔り枝もたわわな子なき家	をさす気の嫁	高知県	良い話だけ持つてくる枕許	文化の日叙勲へ菊も香を添える	鳥取県	ひよつとしたショックがたたるノー誠実を買われながらも平社員	市	1	あけたてに未だおさまらぬふくれ面	仲人は疣もにきびにしてまとめママゴトに親の躾けの端をみせ	直して見栄つづく
		豊		森	j	丘	嶝			Ш			Ш	イロー	岡	ヤル	面	馬	坂
		河		本	1	蒸	本			JII			本	ーゼ	崎			路	上
		1.3		1	./	2.24	50.4											20.00	
		好		良		秋	満			勝			泣		祥			和	山椒

食欲の秋山盛りのめしの味	大阪市	義太夫にうつつぬかした日が恋し大阪市	少し派手かなと云いつつ妻は着て歩き 大阪府 杉	まな枚のくぼみと共に妻は老け大阪府	金借りて戻れば集金人が待ち布施市	押しピンの助太刀に来たご飯粒北九州市	馬鹿騒ぎ音痴は皿を叩くだけ大洲市	但送車二人で乗れるほどに痩せ	酒たのし齢をいのちへ近づけず	配うて 言うほどの とともない 記	もう一人帰える子があり妻は寝ず	鍼灸にすがつてみなはれその痛み洋酒の方が好きでいささかあがめられ	大阪市
	桑	森	歩杉	谷	坂	Ξ	堀	上		大	森	られ	小
	原	本	本	沢	東	上	内	田		久	本		Ш
	喜	黒	白	源	若	春	暁	照		保安	良		世
	風	子	扇	JII	芽	雄	風	代		产	夫		47
うちのエ		翌日	j.	結	欲	Ŀ	-						
丁でなくてよかつた非行記		翌月の予算にまわす替ズボン	よせ鍋の湯気の横から美妓の酌	結局はひとりでなやむ金だつた	欲望を心に秘めて明日に夢	どんな金で建てたか豪壮な銀行		7-1		-1-		腹へつたへつたとつぎつぎ戻つてな	竹原市
うちの子でなくてよかつた非行記事	南	Ti Zi	i i	はひとりでなやむ金だった	に夢します。	こんな金で建てたか豪壮な銀行 カラド 方	申うデオ		·	ユツと鳴る帯はムードの中に生き	宗	へつたへつたとつぎつぎ戻つてな	竹原市 山
丁でなくてよかつた非行記事	南条	古		はひとりでなやむ金だつた	に夢してあり、ライチュラ	l) i	で 神戸 ア オア オ	「与	3木市 高 木	ユツと鳴る帯はムードの中に生き	堀 /	へつたへつたとつぎつぎ戻つて来	
丁でなくてよかつた非行記事	(H)	计		はひとりでなやむ金だつた	に夢に夢りる	歩 オ	で発育する。	1 与	多木市 高 木 繁	ユッと鳴る帯はムードの中に生き	堀ノ江川	へつたへつたとつぎつぎ戻つて来	Ш

ΓZ 課 題 よみ」

乃 生葭 選

仲 一大事なのにこよみに頼りき気に入らぬ縁談こよみにかとつけ ケチついた夜はこよみを繰つてみる トラブルを祖母はこよみのせいに 温曆来夢 .人が趣味でこよみはくたびれ の目にこよ 見 室 年 いつばい 倍 土がこよ るお開 日 楽し日本の四季に さがし 佳 家運 もう来年 3 みと別な花咲 通りの 7 ん大 よみ 貯 を 0 落 た I こよみつる 霜 あ 0 L E る行 ろが から てる母 得 下 か 1) 3 40 0 3 世 きさ子 同同清同 酔 - [10]

こよみなど支那の事やとアプレ言 かつぎやが 縁談へ祖母はこよみへ 式 x 2 みでもつてからのこれスケジュ 2 友 こよみでは こよみなどと恋 の日は ょ 引 訳けみたい 1 よみでは 年 ふみよ 0 1 を 娑婆に 暦だ ル 10 足 事ある度に こよみを見 0 早 け 換 早 霜 お 早 月 P では 算 12 < H 故 女 暦 南 蓉 主 決 85 秋 郷 国 置 3 0 義 3 と母 が 85 惠 0 霜 な 者 2 5 を見 0 花 2 2 ね 嘲 ょ か ょ 0 れ 見 便 か 笑 1 け V. ず 3 1 IV ず n 4 みさ子 同 弥 同 清 同 50 勝 1 酔 子 子 子 茶 生 夢 栄

締切・一月二十五日着便まで 三月号発表「犬」

る。

なるべく、

それを詠んで欲し

から続いている潜入観を持ってい

かったが、

単にカレンダー

を詠ん

だ句もとって置いた。

うれしい。きさ子さんの句として とややこしいのです「母の目に 事を説明して置く。 たとか云う意味であって、 か不首尾だったとか邪魔が這入っ っとした調子で古いこよみと云う の句は何の飾りけもなく、 んぼうにする」と云う意味でない 「ケチついた」は失敗に終 佳作中のきさ子さんの初めの句 特質を摑んでいるところが うっかり読む すらい ーけち いったと

概 評

麻 生 葭

乃

せないのにも腕が要る。

無理のな

表現である。

阿茶さん、

清子さんの句には、

それぞれ

着想をあまりカビくさくも感じさ

こともないが、

そのありきたりの

はありきたりの着想だと云えな

い句があった。 きから発表することにした。 平抜きと佳作の二部に分け、 先に発表していたが今月号からは でも「こよみ」には違いないが 投句の中にはカレンダーでもよ れまでは入選句の多 と云うものには私どもは昔 なるほどカレンダ 63 人から 平 抜 ていられる事がハッキリ見える。 自分の周囲に句材を拾う眼をむけ ん

JII

柳雑

用の方は至急お申しこみくださ 近く整理いたしますので、 誌// のバック・ 取 次所 ナンバ 川柳塔社 ご入

67

良 九十蒲 都 平 住 印 営業所 い安 買い 倍野 生 店 店 店 店 店 店 店 店 crcdit system

月賦百貨店

突

如

入院

曆

白

ま

る

だ

0

た

0

10

葭

73



電話-622-0015~7

## 水 府

### 句

百

明治四十四年三月号青柳誌第三巻第三号 より

を捨てて五十句を採る。 の二人百句会を開く、 月十九日千 足 松庵に於て、 互選の結果五 水府、 + 松 十句的

物思ふその足元に水溜

足絶えし町

の夕刊

独り捲く足に染まりし糸の

ふり返り見れば渚に足

の跡 紺

唄ひながら弱き歩調に君と我

" 府

る床の

足音軽き公園 千鳥足未だ行く先の定まらず 足弱を待てば幽に水の 宿の灯に今日 鴬張りを通る快感 疲れ足ながら廓の格子先 の行燈に足弱 の夜の辻占呼べば素足にて この疲 の朝 れの 音 旅日 記

鍋焼を売る素足の男 支那人の女の足に

音にすかせど更に

に影も

な

家に我れ待つ灯の一つ

た疲れた足に花が散る

干鳥足早や我家の前に来て 急ぎ行く足にからまる広告紙

参の中の一人は鼻緒づれ

春

の風

急ぎ足何処まで行ても前に人 足元の溜りを見れば傘の文字

の音皆とりべくの淋

しさよ

停電の

汚ない足袋に心づき

鬼の

別れて知りし疲れ足 間を行く脂足

、板の

水

府

疲れ

足時間問

ふべき家もなし

ステーション皆足音のあはただし ふきたての椽に可愛い足の跡

帰り来て現ツ心に靴の紐 病室の昼足立のぢれつたさ

跣足で通る若草

0

朝じめ

泥足で庭

相

す

れば足袋の砂

加

日曜の昼を跣足の庭仕事 逢ひし夜の雪駄 夜桜を帰 迷ひ来て只足跡 足に委せて日曜 膝枕髪のほつれにうつら 疲れ足もう靴下のすれ

を懐

しむ る儘

宵財布豊 止めて見

かに足の たが夢中の急ぎ足

府

の晴 の音の忘ら

n

ず

もう一 足繁き此 奥の院辷つたらしい足 疲れ足地図の村落未だ見 水の音坂は爪先上りに 既足のまゝに叩く病院 丁に足の重たき 処は松島桜筋 7 0 跡 ず

足音の 米を踏 膝枕金簪の耳そうじ 足早やは霞の中でまち合し 寝つかれず足音ばかり耳 四方へ消える隠れ む男の唄は恋の歌 た立ち ん坊

急き足校門を入る友の影 泥足を母に洗はす蜻 足を投げ出す暗 膝枕無心を云へば寝たふり 疲れた足で身を支え 一疲れし脚へ空俥 へ投げ込む花便り かりの椅子 船釣 0

終列車

散る桜足投げ出した人の背に

裸のまゝで爪を剪り

急ぎ足で来て立

機

W

舞妓は眼

かけて見る 止る蓄音

ことづけに草臥足の儘でより 炬燵から投げ出す足袋の脂 半鐘に足の顫ふ物干 這入つて来もせぬ次の間の足音 砂埃足弱花を見る気なし 打水の玄関に脂染みた下 柱暦をむしる立膝 膝枕囁けば只うなづきて 膝枕見上げば襟の妻揚枝 番の立膝で読む端唄本 にうつるとは知らで抜 駄 足 の香

> 松 足を早める峠の夕日 編み上げを素足にはいた夏の 足が元手に親子三人 朝

> > 松

11

霜に鶏の足跡朝の程

11

(原句のまま)

6 む情に溢れている。 の弔辞だったと聞く、 **BIS** 筆を取られて、 君」と題した一文は、 傘」八月号の岸本水府師の 路郎師の霊前に捧げるため 切々友を悼みなつかし 病床で仰臥のまま自 ああ、 路

句会に、 川柳社が出来て一年目の明治四十三年の夏の の人ではなかった。 家さかんに句が通る。 訃報胸を打ツ。 僕のとなりへすわった干松という作 思えば そのはず今日はじめて 僕たち 0 関西

千鳥足女房に媚びる真似もしての運びの軽き逢ふ恋膝枕貸して伏目の恋もして

踏切で踏を返す朝歩き 膝頭抱いて見つめる沖の浮標 風荒れし朝猫の足跡

だった。この日から僕とのつき合いが始まっ た。..... そして又川柳雑誌終刊の追悼号に水府師 僕より古いとわかっ た。 これが後の路郎 君

会報を発見。 どくうちに、各地句会報の中に関西川柳社句 四二年十月号) で購ったままの「獅子頭」 り、なかなかのウマ合いだった。 肉鍋を一つずつ取って「足百句」 寄せられた一節に たまたまある調べ事があって、曽て古本屋 一僕と二人、 師子頭誌は第一巻第六号 (明治四十三年一月号) 君の家で徹夜して、 回例会より、青柳誌は 青柳」 をつくった 誌をひも 十五銭 に第三 (明治

二人三脚のそれと似し妻と二人 晴衣装巴里の宵をダンシング 摺り足に燐寸を探す虱の夜

れ足草に投げ出す麗さ

ベンチならベンチベンチならベンチ心待

八の足投げだして一くさり

足元に蝶々の狂ふ下り坂 脂足脱ぎし靴下はき悩み

膝立てゝ二階から見る朝桜 足まめの目あても無しに家を出る 脂足花見戻りの足袋の裏 夕日さす病室に我が脂足 男嫌で通る紺足袋 急ぎ足夕立雲を前に見て

一十二月例会よりを連載している。

心斉橋筋大丸前 電話如三三四四番

は曽て天涯として知られた千松君が現われ」 ている。九月例会記事に当百報として「先月 八月例会より干松として初めてその名を連ね 云々とある。 師は水府師の文にある通り翌年の四十三年 水府師は第二回例会より水府丸とし

句会報のなかの一つだった。 頭になかったら、恐らく見逃したと思われる 句会報を見つけた。水府師の追悼文の事が そして号を追うにつれ、本文の「百 5句会

両師を偲ぶよすがとしたい。 思わずに居られない。私するにはおれない気 で故人となられた。巨星を失った悲しみの中 流の美しさを思わす記事を見出した不思議を に、 今は水府師も路郎師の後を追う如く相つ 若き日のお二人の奇しき出合い、その交 編集部に計ってここに全句を再録して

49

研

究

題

市

場

清

水 É 柳

した。 を見てゆきたいと思います。 ただいたのですが殆んどが普通の街の市場で 市場ですが牛市場魚市場など色色作句してい して頂くことをお願い致します。 この教室を御支援下さって盛大になるように 明 けましておめでとうございます。 その中から着想や表現のすぐれたもの さて課題の 本年も

甲斐しい花嫁を描いている。 のだがこの作者はスラックスを見付けて甲斐 花嫁というものは着飾りたいものだと思う スラツクスもう花嫁の市場籠 李 朋

明るい家庭をよく詠って余すところがない。 H とうしたことも若い間のことであろうか。 一旺だからアナタも来てよというのだろう。 日旺の市場へ仲の良い夫婦 レビ料理メモして市場へ行く若さみさ子 ミングも軽く新妻市場行き 明 夫

慣れぬ育ちという句語がこの句の焦点である

市場行き慣れぬ育ちを見ぬかれる

夏

と思う。

目玉の句は特価の目玉商品だけを買いに行く

十円安い歩をのばしとは、よく詠まれている

作者の進歩が見えてうれしかった。

市場から市場へ目玉だけ漁り 市場まで十円安い歩をのばし

秀

夫 雀

滋

ねだっているとか、動かないとか説明 お菓子屋が関所という見方が面白い。 のだ。そこに観点の相違がある。 男から見れば気のきかぬ事だと感じるのだが く描き出されていると思った。 ている。次の句のまだ跳ねる子という句もよ で、関所になっているという句語が生かされ 母親ともなるとそんなことは気にもかけない こうしたところに女房族の醍醐味があるのだ 乳母車狭い市場を気にしてず 気のきかぬ女市場へ乳母車 昼まではママ鏡台と市場行き 市場迄来でまだ跳る子を叱り お菓子屋が関所となつている市場 子供が りしない 弘 R 専 生 4 甫 翁

> という主婦の気持ちをつかんで をそそられたのだろうか、いい着想である。 果物の熟れた市場でふと止まり 血圧へ市場籠には野菜増え 匂いでなくて果物の熟した匂いに食慾 る。 譲

思ったが、御近所の用事で市場へも廻っ 出入りの御用聞きが市場へも頼まれたのかと もとれるので弱いと思った。 御近所の御用市場も廻つて来 たと 史

ビタミンCを取れと言われたのであろう。

予算を立てていてもどうしても足らなく のがお金である。もう二三日というやりくり をこの三句は詠んでいるのである。 月末の市場で怖く値を眺め 月給前隣誘わず市場籠 市場籠給料までの日をかぞえ 安 なる

聞くという表現もよかったと思う。 ものにするという穿ちも面白い。また財布に 奥さん同士の話題から籠の中味を聞いて同じ お隣りに負けまいという意地張りも面白いが あれこれと財布に聞いて見る市場 市場かごのぞいてうちもそうしまひよ美代 お隣りに負けない市場高くつき 句楽坊

まだ残ったのがあった筈だと言い乍らである 踏をぬうてゆくのである。 まだ何を買うているのだとふりむきながら雑 市場街男はさつさと先へ行く 市場へは行かずラーメン啜つとき 静観堂

珍客に市場のさしみ馳け戻り 酔 夢のないでよかった。 いてよかった。 徹 也売声につりこまれた気持ちが出ていてよかった。

の小売店の店先きのことであろう。

雑

詠

飼い主のいれずみ秋田犬覚え宝石部ほしがりません妻でよし 宏 方

年でゆけばすでに首相になれた僕歩け歩けバス代かせぐわけでなし弁護士はホシの味方にきようもなり飼い主のいれずみ秋田犬覚え

今治市 長 野 文 庫

花形は教室と別

運動会

孫が来てチャンネル半裸のショーにする

市場の招待旅行も段々と豪華になって来たの 水で濡れたのか、汗ばんだのか、とにかくし けというこの頃である。 市場のチラシに特価品のない日は休みの日だ めつぼい硬貨であった。 今日一日という語に作者の感じが出ている。 生活の愚痴というよい句語で生きている句。 よくつかんで居られるし、表現も申分がない 汗はんだ硬貨を市場釣りにくれ 湯の町を市場のおかげ妻も知り 特価品市場で漁る程に馴れ 特価日に限り愛想の好い市場 生活の愚痴もつめてる市場籠 場から今日一日を買つて来る 繁太郎 万 春 育 杏 弘 花 朗 竺 雄

ちやぶ台の勤務が長い公休日返り咲き打つて変つた低姿勢じり貧の相場の如く老いてゆく

で、そのおかげでというのである。

高利貸奥から琴の音が洩れる
なとの変らぬ位置に彼岸花
がいてくれるひとなし石を磨ぎ
がるさとの変らぬ位置に彼岸花

である。着飾っている人間を思わせる句。である。着飾っている人間を思わせる句。表の花花しさに引かえて裏へ廻ればこの通り表の花花しさに引かえて裏へ廻ればこの通り

おいと見たところに作者の眼がある。 は対する情景であるが、後の句の長靴が離さ 無市場照つても長靴離されず 松 風 無市場照つても長靴離されず 松 風 無市場所であるが、後の句の長靴が離されないと見たところに作者の眼がある。

宛先 大阪府南河内郡美原町丹上四〇四四月号発表 締切 二月二十日 研究題「乗り物」 五句以内研究題「似合う」

何水 白 柳

馬

#### 木 Щ 遠 \_ 選

馬面 丙午 子宝 十円玉 入れた 木馬で 胸を十円の 馬が 機嫌を とつて 見たこともない馬の絵書けと云い 回転木馬この子生き馬未だ知らず 子の馬になって晩酌 遠駈けの馬にはどうでもいい景色 ハイヤー 0 晴れの 璃 を 生ま ない ように 式 夫婦で 馬 看板に 丙午 など ケチを で馬まで曳いて戻つて来 埋 祭に 機嫌をとつてくれ 中 E してよく 中 5 鎧武者を 馬頭 運 きい 見 3 33 当 \$ 7 観世音 馬の H つけ 稼ぎ 馬面 乗せ 取 ず 脚 七面山 卯之助 代仕男 旭 朗 男 市 翁 寡 雅

> 斜陽め 馬券 死ぬまでうっちい倒ちゃまでの馬力馬 訴えるような馬力馬の目と出合う 狭き門馬車馬 神馬とか云うて ダービーの花輪 八間に 百 手に 長 < 神馬に 0 馬 みな 手綱と 見たいなのが 0 され 血走つ へ馬はソツポ向き 自由を 嘶 知らず た き た 菊 不 奪われる 眼すえ 競争馬 通り 賞 古たつみ 雄 可 静 平 竿 水声住佑雅

菊花賞馬はだまつて 馬面と丸顔 奥さんに 敷かれてるなと 見 合 0 餇 座に 葉 食 ~ どんたく 春 古

うちじや駄馬をとを駿馬と使い分け

惠

朗

馬想う

雄

戦没者 叙 勲

へ軍馬

順が

穴

0

騒

き

10

馬

0

無表情

藤

光波

涙含んでるのか 神馬の数 ムチ加減馬もその気になって駈け 白衣の 駑馬の 人に 始末され 項垂れ 十九平 宗太郎

親方が

左利かす間

待

0

馬

九十

枚

残る 馬券を 握りしめ

健

馬車馬のわき見もせずに走らされ

勝

子

Ш 111 39 茶 選

和服着に 見合写真を 買い和服着る手順明治の 気に

かぶり

ふり袖で花束抱いて

マイク

卯之助

九平 九平

追

伸に和服がよいと 書き

ゆきたけをセンチで云うて和裁塾

本命が

落ち八百長と騒ぐ

十万人の

気を

もませ

和

服

鼻の差で負けた馬券が捨てきれず

36

ジンクスに反し穴馬 当てて 来る

八百長もしてる競馬にかける運

決服で支 振り袖でツイスト 踊る 若さなり和服 着て 日 曜 大工 休み なり 軽症の 四苦八 和服着 お転婆 妻と出る晴れ着へ新春の陽がまだ お茶席に花を 正月の 和服へ 歩幅 女教師の 和服へ煙草 くつろいだ風が 和服の 女医さんに 診察のあと 和服なお女医の 良心 くつろげず お婆さん 明治の 見違える娘に 着流しで出ればタクシー 一人来た 旅の 大股のくせが 週間 から で 来れば よかった 苦した紬 和服 た女 0 カメラ持ち出 課長 自由 情が 和服で 吊つとく 斜 咲かせている 仕上げている 着物を 和服へ雲が 束縛 とは N 流 あ 洒落も 云い す 織 10 す ふてくされ 着ていても いきもよか 0 娘 袖を抜け 帯たのみ せとき 上る 人知らず 顔 長すきる 旅の 0 和服 和服 湧く 和服 和 10 雨 禄 染 服 恵魚山 七 宗太郎 專 干句 淀 1 初 木 要 九九寸 面山 楽坊 月 住 翁魚 翁 甫 亭 子佑方次道朗

弘 童 春 静

佑

珍客 珍客へ 珍客へ

0 妻六

長座

空かず

月

Ш 引

多闡子

感 女房が嫌

で袖

を 63

十九平

雄

珍客へ本家も分家も

みんな 寄り

珍客に されて 田舎の 熱い

風呂

うろたえただけで珍客さつと去に

IE.

祖母も

話の

仲間

b

浮世絵 和服着る妻へ 白き襟今日から 寡婦と云う 和服着。キモンキー踊の娘に見えず やれやっと着き着物をしんどがり 花やかな ミス農協紺のかすりがよく似合い たすき がけ お茶会へ渋い 0 ミスを 和服に 振袖 良さは 和服の 乱れ裾 祖母は 元気な 和服 あれてれ 縫うて で誘い 路地 使われる 助けられ 0 台所 喪服 奥

竿

胎動 宿題 向い風和服はくるり お見合いは上々 0 を和服で包む秋の冷え 和服 徹夜 安緒 0 向きを 0 8 和服 が かえ 縫い めぐ 惠 光 酔 庸

朗 郎 夢 珍客の 珍客に 珍客に 珍客の 顔に なつ 娘 今度 は 一升びん 0 琴も披

珍客の 酔うほどに 久しぶりヤアヤアヤアの客が来る 珍客と言えどこの 珍客の訛り くす くす 珍客の愚痴も暮しの ことに 酒量の 子象も 0 10 も過去を刻むし て恩師に 珍客生地 負けぬ 減つた 照 築 れ 見て のを 3 笑う 子ら 迎えられ 露 0 物見高 国訛り 買い する 嘆き 自慢 繁太郎 古 九九寸 二月 朗男夫 蛙

結城着てお茶できたえた線を出し

客

ひんやりとからいるではってりようはん

古

方

天

珍客も

酔えば

軍歌で

合わす

仲

甦

光

尼

緑

之助

選

国訛り 珍客は 珍客が去つて 家計簿 珍客へ子供はうちに 御無沙汰 を 詫びて 珍客 珍客にされて無心を 珍客の白髪その後を 聞 着せるとてら 内の 出して 珍客 4 出し 夜を ばかり のしつけ糸 愚痴ばかり 見て 3 そびれ 借る話 明かし いぶり 62 3 代仕男 卯之助 恵二朗 雄 珍客が

代仕男

īF

朗

秋 どんたく 古 藤

月

七

五

和

服

姿

0

男

0

児

波

夫婦喧

嘩

10

水

を

差

L

志

朴

嫁の荷 珍客と並んでおしやまよく 喋り 珍客へパパへそくりを 居候になる 珍客へ妻とも 珍客に芋大根 0 蒲団 珍客 から 珍客を 泊らせる ٤ 25 は 3 7 出す 3 知 2 5 台 ば 気嫌 古 古たつみ 宗太郎

方

魚

珍客が

珍客にゆつくり されている 背広一着 飲んで 去 赤字 10 次蛙

LABOUT SALLS 品質優良 大阪市東区常盤町一丁目十一番地 TACHIKAWA PEN 立川ペン先株式会社 チカ ワゼム 4 タチカワ画鋲

# 阪文化祭川柳大会

大

会場— 大手前会館

た。 ポート ポート ポート ではんば」川柳社の当番で は、と「せんば」川柳社の当番で ののでは、「番傘川柳田和4年11月27日、「番傘川柳田和4年11月27日、「番傘川柳田和4年11月27日、「番傘川柳田和4年11月27日、「番傘川柳田和4年11月27日、「

本年はいつもより一月余り遅く、また地の利も悪く夜の集いとく、また地の利も悪く夜の集いと云うので出席数をいささか案じてはいたが、四時頃からぼっりぼっりと出席者の顔が見え、席題が切の六時半には、昨年とほぼ同数のの六時半には、昨年とほぼ同数のの六時半には、昨年とほぼ同数のの六時半には、昨年とほぼ同数のの六時半には、昨年とほぼ同数のの六時半には、昨年とほどの集があり、当番幹にのとした事だろう。

司会は番傘川柳社の岸田万彩郎 氏が立ち、本年からは路郎氏と水 所氏の顔が見えないのは何んとし ても淋しいと、哀悼の意を表され た。

での面白い話をされた。 での面白い話をされた。

たとえば、大大阪と云うのは、大きな大阪市にしなければと、三大きな大阪市にしなければと、三佐にした時に云われた言葉であって、現在では決して大きな都市ではない。

しかし経済的及び人口の密度で しかし経済的及び人口の密度で の上で示された。

が、三保の松原や、松島よりも松 繁華街でも大阪市の地図にない所 町から虎が出た話 面白いいわれがある事、法善寺横 の名前にも探究すれば、それぞれ た高津の宮の所在地の話やら、 スガイドが云うているが、田を埋 は梅を植えてあった田のようにバ めたので「うめた」が正確だ、 調査過程の拾い話になって梅 0 話 (これは冗談) 西成千本通 橋 ま H

正恵方の南海沿線

### 初 詣



住 吉 大 社

水 間 観 音 見塚駅のりかえ水間駅下車 320円 千本場と開連大餅まき 1日~3日 和歌浦東照宮和歌山市駅の2かえ権現前下車 420円 報覧名力特別展 2日・3日

和歌山市のりかえ紀三井寺下車 420円 〈運賃はかずれもなんばからの往復です〉

お問合わせ・南海交通社 (641)8686 (341)5038 (716)8661 (361)3126 (堺38)0687 (和22)2321 南油電車

になったと、うまいしやれで話が あり、まちまちの話 きるべくもないが、時間に制限が 並木が多くあった話、等々話はつ 被講になって皆カタズをのんで (町々の話

聞き入っていたが、残念組にはハ も、未熟ながら今年から各川柳社 氏の意志を継いで発足した川柳塔 生々庵氏の被講に先だって、路郎 っていた人もあったようである。 ガキが着かなかったのかしらと笑 何んとしても嬉しかった事は、

> 五十分。 を出した事だった。 われた川柳塔社から、市長賞二人 に仲間入りさせてもらいますと云 一閉会八時

厳粛なムードしきりに咳が出る 々の秀句に輝いた。 席題「ムード」 なお「文化祭川柳賞」は左の方 清水白柳選 上田佳風

お茶だけで寝る淋しさは妻も知る 兼題 席題 「実力者」 青木三碧選 木幡村雲選 寺井智海

身方より敵が惚れてる実力者

現金を包む手許のさりげなし 現金 岡橋宣介選

特ダネが静かに眠る釜ガ崎 兼題「特ダネ」 中島生々庵選

堀口塊人選

働いた手足が土と同じ色 兼題「土

(金井文秋記) 福本白步

雅号ぶ

お茶目で我がままの駄々っ子だったの 誰れが何時云い出したともなく茶々

氏である。 那谷光郎諸 有働芳仙、 市場没食子 長野井蛙、 野村味平、 は小西無鬼 機中の作家 なし」へ待 っちやけば

本多柳志

鵜飼蟻朗 正本水客 ある。 常任理事会が開かれた。議題は に「こんごの方針」「その他」で 「現況報告」と「会計報告」それ 十二月四日六時から本社楼上で ★常任理事会★

倍加運動である。 途はひじように明るく、 告では日ごとに購読者がふえ、前 報告はむろん赤字である。現況報 理事諸氏にもお送りするが、会計 の強みは各地の同人諸氏の購読者 いずれこんごは印刷して参事、 なにより

ど誓いあった。 月末発行は絶対に厳守することな 句の向上と読者へのサービスに

かった。 あわせがきいていてか出席率もよ 会議は二時間以内に終了の申し

が出席した。 松園、多久志、 すゝむ、庸佑、 白柳、 形水、 好郎、 古方、梅里 生々庵、 一三夫諸氏

日と定められた」一月は休会 毎月四日を定例常任理事会の

### ACHA ヤマカワ・アチヤ

雅号ぶつちやけばなし(6)

すが「茶々」と云う方があったので阿茶としまし

いたしました。川柳も「茶々」でゆきたかったので を噛みそうだから師匠の一字を貰って「芝阿茶」に

子と呼ばれるようになりました。哥沢の名を貰う時 「茶々」がよいと云ったのですが「芝茶々」では舌

山川阿茶 •

伸びもせず姓名学は嘘かいな ような句が出来るかもしれません。 だそうですから、今に「あじやあ」と云って頂ける

れたりしますが、姓名学上は本名よりずっといい名

た。男か女かと聞かれたり、阿呆と読みまちがえら

やまかわ・あちや

女医・六十九歳

55

### 第百七十六回 (新年度第四

#### 兼 大 題 萬 「筋書き」入選発表 ]]] 柳

投句総数 清 水

五百二十六句

共犯の逮捕筋書きみな喋り 結論から聞こう筋書きあとになり 言わすだけ言わとおいて批准する 子 借金の筋書き妻が書いてくれ 筋書きのあとは社長の肚一つ 筋書きにない質問が出てあわて あきらめてます筋書きへ耳かさず Щ 野迷路

筋書きの知れたテレビへ横になり 筋書きは飲んだ振りで酔いつぶれ 洋画観る祖母に筋書き吞み込ませ 大阪 富田林 東雲楼 痴

筋書きになかつた筈の仲間割れ 甘すぎた筋書き出鼻を叩かれる んちやらを筋書き通り言え去に 弘 朗

トチツタのがうけてまなら筋へ入れ

七面山

鵜吞みした筋書きだから隙が出来

悟

筋書きと別に二案を考える

筋書きを読んでダイヤル廻される

児

大阪竹

荘

筋書きの通りに怒るだけ怒り

筋書きはプラス2で割る額でスト ボスまたも筋書き通り保釈金

改選へ筋書き通りの顔が出る 筋書きをかえさすほどに顔が利き 大阪 小松園

停電で苦労の筋書き無駄になり 筋書きにない事故に遭い浮気バレ 筋書きのうまさ仲人またまとめ

アドリブに合い皮胸も出来ていた 著にダイフォーー 筋書きは知らず劇中劇踊る 墓に朱を入れ夫婦とも遊び好き

寺小屋の筋を知つてて泣かされる

未熟さを云わず筋書き云々し

みえすいた筋書きまたも居する気

賀

そこまでは筋書きにない酒が出る

大阪

あいき

岡

山久米雄

筋書をみんな知つてるからもつれ 筋書きを狂わすくしやみとしまい 筋書きに不渡りまでは組まなんだ ヤシの筋見えてお客が散りはじめ 筋書きがないから話はずみ出し

筋書きのよるデートへ日が暮れる 筋書きの半分ほどでことわられ 筋書きになかつたことで逮捕され

度とし年度間の綜合点の成

目的とす。 競い斯道の向上発展と柳人 相互の親睦を図るをもって 道場としてその技その覇を びかけ名実共に唯一の川柳 れる全国の同好者に広く呼 本会は川柳に趣味を持た 大萬川柳会々則

する。 平を期して到着順に一句毎 製ハガキに限る。選句は公 句は一人五句以内と定め官清水白柳氏が担当され、投 ま一連番号を附記して選句 に句箋に清記し無記名のま 近水白柳氏が担当され、投毎月の出題並びに選者は

四、左記の採点法により月々 三、 毎月二十五日締切、翌月 二十日発表。出題及び入選 に掲載される。 の発表は毎号の川柳塔誌上

五、毎年一月より十二月まで 毎月のベストテンを発表す り翌年十二月まで)を一年 平抜き一点とする。 人位二点、佳句一、五点、 る。天位四点、地位三点、 の得点を加算し順位を定め (但し本年度に限り十月よ

#### 56

事なかれ主義に微する袖カバー 団体を見くびり鳩も舞い立たず たかが一泊の詰込んでいる鞄

危篤駈けつければ信者に取り巻か

n

次ぎの兼題

雑

別居して仕送りだんだんずれてくる 徹夜国会その体力を買われてい

シーズンへ次々見合まだ続け 手不足で祭り太鼓の音も冴えず 寝返りに主流派裏を握られる 詠

筋書きがわかつてるから出し渋り 筋書きへ素知らぬ顔で乗つてやり 筋書きを知つてるらいやりにくさ 筋書きが読めて利口な女秘書 小刻みに筋書き通り値上げする もめかけたとこへ酒肴を運ばせる 32 岸和田 阪 岡 弓 要

大阪

水

坂 市

峰

柳

児

金も出来筋書き通り別れる気 銀行が貸さず筋書きまた狂い 筋書きを越えて恐喝罪になり きさて 筋書きをハハンと読んで裏をかき 筋書きと別な涙にみてくれず 筋書きを喋る隣りを睨みつけ 示談屋にもう筋書きは出来ており いわけが筋書き通りおもしろさ 天ノ句 人ノ句 大 阪 原 醉

どうせそうだろうと筋書きみくいち 筋書きを聞いて判こはまだ押さず 選者吟 和歌山

> 大萬川柳ベストテン 月現在

大 南大 阪内 阪

六、本会の大会は毎年一月に

位によって定める。 し同点の場合は前年度の を贈呈し大会の選者に推 ストテン把持者に賞状賞品 績に依り順位を定め年度べ

祝賀宴に招待する。

優但

七 四 五. 静水松園 きさ子 宗太郎 木万

泉

没食 茶

七、投句その他に就いての

連

会費は百円投句料五十円と 投句料は不要、但し大会の 開催する。本会の会費及び

絡先は

二月の兼題 投句先 発表 締切 「苦笑 発表 締切 大阪市阿倍野区 松崎町三ノ十 「抜け道」五句以内 十二月二十五日 一月二十日 月二十五日 月二十日

所題時

以下略

玉造交差点南一〇〇米 洋酒、風、お辞儀 十日(月)午後六時 玉造川柳会

題時 二十日(木)午後六時 南大阪川柳会

大阪信用金庫階上

芽、下見、卓上、顔まけ アベノ区松崎町三ノ十 割烹大萬

所

大萬川柳会

電話203935

大萬川柳会

月

の

句 会

大阪市阿倍野区松崎町三ノ 大萬川柳会宛

の天女に扮して踊る若柳湖花氏。 阪御堂会館で常盤津「三保の松」 常盤津錦司四十選年記念公演に大



展 柳 界

> お便りを待っています。 あちらからてちらから

☆麻生葭乃先生は金泥集の

句に対し本号から概評をさ

者の列に加わり白柳、一三 もに一流誌であること、生 塔"を執筆され、内容とと なかで福永泰典氏が、川柳 を展望する。を特集。その 誌だが、12月号は『川柳誌 ンスな企画をもって鳴る柳 ☆「川柳平安」はハイ・セ 家奮起の年である。 れることになった。女流作 春巣、多久志氏も選 ☆札幌川柳社の第九十五回 島市中央公民館で開催。

は十一月十七日夫人同伴で 練の年になりそうである。 が、どうやらことしてそ試 哉とはげましておられる 句会は十一月六日竹原市役 という十二時間バス旅行を 青海島廻り、湯本温泉泊り 秋芳洞、秋吉台を見物後、 **☆菊沢小松園氏** 夫氏 また 編集の 衝に 当た 大会は十一月二十一日、 ☆児島市文化祭第八回川柳 所会議室で開催。 を賞でて帰阪された。 楽しまれ、翌日厳島の秋色 ☆文化祭協賛たけはら川柳 見せ、 の妻 湯けむりの中に女として 地底まで神は造化の妙を たのもしい哉、力強い (湯本湯泉にて) (秋芳洞にて) (大阪市) 児 た。 柳の雑談にたのしい一日を

0 都市大原野神社へ吟行。 ☆和気川柳会(岡山県)十 例会は十一月八日に。 の西村句楽坊居を訪問、川有子の諸氏と京都府八幡町 ☆大鉄川柳会は文化の日京 本多柳志、本庄金三、坂川 ☆清水白柳氏は十一月二十 一月句会は二十八日町役場 日傍島静馬、 金井文秋、

過ごされた。 以上句会寄せ書を頂戴し

淋しいものになったと。又 センターへ。路郎先生や詩 十一月十九日堺市友会のメ 人の安西冬衛氏を失った堺 琵琶湖大橋、びわこヘルス ンバーと名神高速道路から 介八木摩天郎氏 友会の秋季総会はとみに (堺市) は

講に昔の学生時代をなつか

雪だそうだ。

おられる。青森はいよいよ 失った淋しさをかみしめて ていますと、又一人先輩を ぬものとつくづく思わされ った訳で人の生命はわから

橘高薫風・担当

科に滞在、机に向っての聴 た。 どき」というお話をさ と。十一月二十一日には万 季成人学校の開校式に出席 養成所高等課程、工作管理 桜木町国鉄大宮工場技能者 管理者教育の受講に大宮市 ☆小西雄々氏 会に招かれて「川柳の手ほ 福寺で行われた婦人会の集 プの結集を計る予定とのこ 十一月二十日には堺市の秋 十月末から来年二月末まで 柳講座のOB会を結成し 新人発掘、 (米子市) 川柳グルー は れ

新年句

雑音を月に聴して年が明け

練早市 霊 眼 子

門駅で別れたのが最後にな 川柳塔のことなども話し合 居)で関西旅行の収獲や、 0 られたが、十月七日の上京 啞三味氏の霊前で冥福を祈 しんでおられる。 会に同席、帰り地下鉄虎の い、夜に故土橋芳浪追悼句 十一月二十六日上京、 ☆工藤甲吉氏 (青森市) 際には武蔵庵(啞三味 高須

ておられる。 とめて新しい発足を念願し てないが、会員の総意をま 生のご逝去以来正常に戻っ 分間でも眠りたいという現 誠に多忙で、 ☆小西無鬼氏 川雑篠山支部も路郎先 暇があれば十 (兵庫 県 との増井不二也氏、 松本波郎氏居に招ばれ、

の藤沢桓夫氏やふあうす

番傘の

者ばかりで興味深い。 た川柳人になじみの、 十二月五日薫風と番傘の

阿達義雄、

清博美、 華、

浜田義

大村沙

企蟬人、

石川県

が、ありが たく 感謝しま 情から編集室へさいさい書 十一月二十四日第三回大阪 て戻り」兄は川柳雑誌社当 家用に手が出ぬショ 自動車ショーを見学。 ーを見 作品が募集された。 梶原溪々氏と交歓された。 切だが、 「全日本近世川柳句録」 伝統、 新興、

区台東三の二の一〇、三桜 官制はがき一枚に一句、 十二月三十日着便の締 破調その他一切を問わ 渡辺良。 宛先は東京都台東 革新、 投句は 本 前 ある。 の幹事であり、 三太郎氏主宰、 両者とも川柳研究社(川上 子著「ひとり舟」 真澄著「指人形」と宮崎慶 いで出版発行された。福島 区下谷二丁目二〇番九号)

いる。 解 岩波新書で発売。 会山路関古著「古川柳」が 広く認識させてくれるだろ れていた珠玉川柳を世人に ふれる往時の民衆の生活や 七九)古川柳の代表句の句 末摘花」などの柳書を紹 柳多留 に併せて、 簡潔な表現の中にあ その内容を解説して 日本文学の中の埋も 「柳多留拾遺」 「万句合」

風

居でくつろいでやっと骨

されて取材、二十三日に薫

一月中旬ずっと京都に滞在

す。今年もよろしく。

公岡田甫氏

(東京都)

は十

を特集、 二月号は鑑賞、 付柳多留拾遺研究 「国文学解釈と鑑賞」十 山沢英雄、 柳多留拾遺 一覧 ☆野村味平氏

(加賀市)

町宮1丁、内藤喜夫方、

いざりび川柳会宛。

い切っ

選もございますので思 今月は尼緑之助先

いたしまし

人から、

「正朗こと戦傷失

☆堀江正朗氏(島根県) 休めをされた。

夫

明のため拙い句を私が代筆

て同封いたしますからよ

☆河相すゝむ氏(西宮市

☆姉妹のような句集が相次 一郎諸氏といっ 若い柳人で 東京都台東 である。 山路閑 執筆 か菱田 電話番号が変更になっ 必定だからである。 っている。 ☆関学川柳会 加三六六一番 、転居。 で開催されたが、 満秋氏 (西宮市) (東京都 (代表

要は眼鏡を拭いて消えないか(真澄抄) いか(真澄抄) いる私がいる 注射針 明けない冬 てきた言葉(慶子抄) ひとつづつ灯がつき解 ガラスの水が平面で未だ 町医のおほき言葉 17 H

ある。 いたが、二卵双生児なので とり旅 さきに姉妹のようなと書 水ぎはに髪くしけづるひ 申込みは川柳研究社

者が幾何学的に増えること 薫風出席指導 に出席すると、男子の出席 女子会員の獲得に躍起とな 時から学生会館四一五号 回句会は十二月八日午後 女子会員が句会 白柳と 同会は た。 第 0

☆「川柳いざりび」 のお便りがあった。 詠 10 公川 喜夫選「馬」5句佳鳴選を 囫 投句先島根県松江市外中原 句料発表誌代として百円。 募集。締切一月十五日、 九日名古屋入りから約二十 は霊学の特別旅行を十二月 柳塔本社へも立ち寄ると 間各地を回わられるが、 句午朗選、 川柳いざりび」 岡霊眼子氏 課題吟 「遠慮」5句 近詠10句紫 (諫早市) では近

曜町三二番地 月十七日午後八時からの同漫才台本を執筆。放送は一 アオバ・シゲオ氏のためには大阪です。へ初登場の宮市)はNHKラジオッ今晩 ☆根上杏花氏 (金沢 市 は

みち〟に訂正。新住所は茨が巨(戸)木倒したままの近作柳樽』12月号の「台風近作柳樽」12月号の「台風 の知らせ。64歳。謹悼の知らせ。64歳。謹悼の知らせ。64歳。謹悼 木市駅前 一丁目11番4号。



## 本社十二月句会

12 · 6午後六時 自安寺

甘党と知つて菓子折りば

かりくる

かぶりつき 馬と一緒に 堂々とカメラかまえてカブリ る

家庭円満

る六十を割ることなく、六七年ぶりに淡舟しかし句会は相変らず賑やかである。出席しなにもかもが静しゆくに。

題

かぶりつき

金井

文 秋

選

フィ

ナレー

桜を浴びたか

ぶり

幕間は

下むいている かぶり

カアちやんのとは忘れてかぶり

候補

甘党にジャンジャン横丁用はなく甘党で 会計と 介抱 に 回されるおまからでほどのよいのがもでい 対 足 ら ず 対 の 忘年会 で 物 足 ら ず 樋 口 梅野誓 栄歩里菜

グ

ラ

純潔の 甘党の 砂糖に寄る蟻にも 負けぬ 甘党やボツボツ 小屋の まんじゆうをつき合う妻 甘党がからんでくるとは 甘党が信じられ 都合のいい時は甘党とし 甘党だから律気に見えるあほらしま 甘いものでデートしている他愛き 宴会のムードに 甘党・エレキに酔ってモンキー まま 甘党 店で女の も三三九度は よろこぶ 顔は 組に 近さ匂 むせる ついい な よく 0 62 うな 喋べ 甘い好 面構え 酒でし 退ける頃 て行き の誕生 て呼ばれ を出 甘党さ ・ダンス

かぶりつき 黄色い声が 渦を巻きかぶりつきしんから好き言う阿呆 かぶりつき駈け上りすな娘等列びかぶりつきにやけた奴が目を細め かぶりつきの凝視へヌード負けていす 幕へ 早うから来て かぶりつき んとうの歳をよみとるかぶりっき ている座席がまったかぶりつき スがけてヌードへかぶりつき 生きてた かぶりつき 花花す野金一三梢梢む菜三夫

名優の眉も

舟摩天郎舟 金多与恒天生專 トメ子 柳 生金水文庸生野 宏子 宝 京 秋 佑 庵 菜

花形の匂に

酔つてるか

り子の ぶりつきの 題 脚が 冗談 顔へテ 出切る 1 ぶらり 言 也

冗談も 冗談が 冗談が 冗談 冗談もいえぬ 冗談でしよう一発で鼻折られけり 真に受けたふりで 冗談慌て 事ここに至り 冗談で 済まされず 冗談とも区別のつかぬ \$ ど念の要つた お上手 ねえと 言える 気易い 言えぬ 出てなごやかな 持ち味 男へ 肩が もてている 口説きよう 受け 仲と さぐりよう 初対面 させ こり なり 金文八摩天三秋郎郎 柳宏子 たつみ 六竜子 彦 里

かぶりつき通ぶつたよに首をふりかぶりつき 女賊の顔が 凄う見えかぶりつき 女賊の顔が 凄う見え かぶりつき埃も吸うて、悦にいりかぶりつきの声がマイクできょくなかぶりつきせりふのつばが顔な来。 幕しまり首もんでいるかぶりつき 全景はどうでもよろしかぶりつき ぶりつきスリにチャンスをあたると居 者にやとわな来たかぶりつき ぶりつき 首をふり 梅恒清庸恒一弓句凡摩操た与痴泉 薬九天 つ呂 里明人佑明舟彦坊郎郎子み志亭睦

冗談 も 言えぬ 女 の 情に ふれ前歴があり 冗談 と 受け付 けずあんじょかつがれちや乳四月馬鹿 冗談の 冗談が 冗談に 落しものした気で 買うた 宝くじ 落しもの戻らず当分 愚痴を 聞き 冗談も軽く 飛び出す 冗談で すましきれない子の 寝顔 冗談がうまくて 軽く 見られたり ご冗談でしようと 毛糸あみ 振られたら冗談にする 間の 冗談にしてもどぎつく身にこたえ ユーモアに 馴れ冗談も 板につき ご冗談でしよう 鰻のように 冗談を聞き なおされて 堅うなり 冗談じやないと値上げに腹を立て セールス の 冗談芯の 冗談が出てつきそいをホットさせ から ことよせ 誘いかけてみる 余裕を 見せた 親 ように しても 話に とげ 逃げて つもり 弱点 つい たらし 黒と 決まつた ままで 賞与の 鉄骨と いう 落 に内しよの二三日 意リレー わからぬ 切り 出す 金の事 なつた里 116 116 メス 0 から 学生帽 ナス日 西田 柳 帰り 悪さ あり する 宏子 与呂志 秋 進之助 川一静恭春喜た潮 太 郎栄馬太己風み花 すみれ 秀静恭白花

明菜

白溪子 選 九十 栄也

アリバイが崩れて しもた 落し物 あきらめた頃に 落し物猫ババ 音たてて 派手 な 単車の 今年も手袋おとして来はミ十二月 落し物見やすいとこへ 置く 善意 守りを落していやな 予感が シー が関を 届けて恋 届けた しかけ したろかなと 少年の なり 出て来た の橋わたし 落し物

小古清双恒文形柳孚淡 松園 楽明秋水志彦舟

拾うなだれかが踏んでいた 清 酒 0 灘 酒造株式会社 . 魚 名乗り 崎 あげ 醸

万年筆 届けたら叱られそうなもの 引き取り手なかっとダイヤの落し物

阿静白 三夫 柳

皮を はぐ ように くつ下 くつ下の柄まで気にしもてて居ず くつ下 くつ下を脱いで出番の足袋に替え すない。足を見抜いたストツキング くつ下の穴を 気にして くつ下の後家とやもめをはかまる 兼題「くつ下」 0 経目で 目立 つ 脚の線 座りかえ 本 多 柳

志選 昭東雲楼 淡金不彰旅阿 どんたく 京舟舟三折大風茶

くつ下

は女尊

男卑の

第

くつ下の足に 見せたくない

穴が 気になる

つ下繕ろう女暮らの灯を消さず

落し物でつせと迷子 落し物がひよつこり出て来ばすまとい 大金で 拾うた 方も 手が 悪いことでもするまに拾う落し物 落し物ぎつちよの 涙まで 落ちていた切符でもなれバスを降り どうでもいい落し物だけ返つて来 落しもの出てくりや礼が惜しくち 拾い主身の 上 当たりくじ落した主が 二人 居り 先に 上から 届けて 不審がら れてる 金額 流して詫びる **5** 諦 いて 間 度 めて 届いた落 横から 話も 聞いて くれ 見に行く わ たままの 知 手袋だけ 残り 42 82 連れて くる る落し物 ままの 押えてみ 落し物 落し物 震るえ 落し物物 し物

柳宏子 多生す静久を庵む歩 すゝむ 与呂志 みさ子 多闡子 葛 17/11 さむむ 松園

学童の 善意 くつ下を洗うて くれる人が 出来 くつ下を 脱いで 女は 帰らぬ くつ下のおしやれが目立つ衣更え くつ下 シームレス妻とき灯をまぶしがり くつ下を脱げば我が家の足となり くつ下に子供の夢を 入れて やる くつ下の線に見せてる身だしなみ くつ下の くつ下を気にする 家の くつ下を脱がともろたまでは知り くつ下をはくのに足の 爪も 塗り くつ下の色さえ夢の ない くつ下も 自分で履いて もう三才 ゴルフからパパくつ下も派手にき ご自慢の足も見せたいシームレス もうくつ下が買うて貰える仲にち れて行く気がくつ下へ裾を入れ 貨 題 もはかぬ若ををうらやまれ 善意が貯 財布から \$ 穴が 踏んだ 軍 矢張りくつ下なみにされ 強さ 替りも 社長 くのに使う一切 する程 あつて 子沢山 気に 女に 追つ つかず 出し 入れ 一円貨が不足出し別にため 足 納屋 なる 客となり くらし くれる 床柱 岡 気 足 淡 舟 操た柳彰子み子大 与呂志 たつみ すみれ 一泉淡摩天即字睦舟郎 川太郎 花一三夫 潮言梅 乃字睦舟 秋

一円貨ご利益うすい音で一円貨 あつめた 老母の 本 一円貨 あつめた 老母の 本一円貨 あつめた 一円 玉の軽一円貨 の中の一 一円貨 五つ 探して 用 がってりるろたななながケットに一円貨 落した ような 顔ですだれる 顔で 一子供に ライター まだ落ちたままになってる一 名から みつけたまま振り向 円貨じやまくさそうに釣 もそ 拾 まぎれ こん で つりはきつちり ご利益 うすい 音で 落した ような 顔で 投げたが のネジ回わすだちの一円貨 要る 掌 邪魔くさそうに 取りのぞかれる 一円貨 う人なき てつぽ むかれた 商売でよく 軽 禀 市場籠 一円貨 一円貨 一円 足り 円 13 円 街 た言八春金一秀 一乃 み也郎己三字坊 花言春野

也

々に見れば 大きいとも きい 大きい 方を目で 押さえ 言えず 松 江 梅 里 昭

別

兼題

懐手 大

大きさが魅力 中味は うたがわず ちびちびと貯めて大きく引つなり 声だけが大きいストのあつけなさ 繁太郎 東雲楼 良

大きさが

当に

ならない

向学の 大志を 抱く 目が き 早耳が大きなミス にして -早工が大きなミス にして -エルスンを 探す 反響の 大きさをキロで言わなピンと来ず 横綱が 土俵を 痛いとこつつき大きな 買出しの荷物ラツシュを気によず 幼稚園みんなに 大きな 丸をやり バラツクに住んで地声の大きすぎ 女 大きいのがまだ叱られている喧嘩 辞めてから社の大きがよくわかり 借金が出来て 大きなことを 言 大声で馬鹿野郎と でなどル引つぱる居るアドバルン 大風呂敷引つ込みつかぬほど拡げ つら当てのように大きい声を出し 食えるだけ儲け 大きな 大きこと言うてた奴がストを逃げ 六十になつても 関の靴は 事ばつき言うてもてもせず 子へ大きいイメージ持では母 こそ 大いなる 生きる 道 大き 大きさるこ くにの 話は 大き 大きい 大き 割つた 余生を 羨やまれ 大きい方を 取り 夢を 脳 励したい 声に 支えあい 無心 B 損もせず 人 動 百貨店 きれい しまい 間 揺 言う 味 き

潮進之助 柳宏子 たつみ秋 文静 金摩天郎 多關子 生々庵 静 馬



切は25日着便。 原稿用紙にペン書き。 書式は発表誌のように。 文字は楷書。 金井文秋担当 締

#### 前 JII 柳社十月例 슾

僕達 えく 円満の 人生 後継ぎに山の境 も 教 お見合へ少し 伏せ見る 片えくば えくば ある 娘で 名前 片えくば だけ 印象の メロドラマ笑えばえくばのき主役 整形でつけたえくぼがぎこちない トランプの鬼でえくぼを娘はかく うれしさは は斜め母娘にえくぼのある暮し のあざがえくばに見た日を悔い の先生 えくぼが あるんだよ ばにほれたのに女房もう四十 今日禁酒言われてもあわて 家庭 えくばの 顔が あり 可愛い えくばから 変り 意中の人の かけた日記帳 片えくば 覚えられ 見 良飴正浄胡秋 江坊州美風月 声水仙六野

> 口軽る 咳すれば遺伝のことにかたづける 咳払い して 会場が しんと なり 老父の咳に老妻も 寝る と する 欠勤の電話へ ことさら 咳も入れ その訛りなつかし 湯女に の丘で散つてふるさと墓もも な妻 故 黙つて 郷 へ盛から 来てお 和細うけ 終列

味政酔光久味光久

足りる

ビスな。企血

が通

人間 そんな人間が好き 人間を 究 眼鏡はずして人間をおりるとする 死人送るさらさらと反り身の白紙 人間の表裏をさげてホステス歩く これは遺書人間失格の羽根ペンだり 両親を 人間と して 見る 十八九 人間讃歌破れ鍋にとじぶたではるな 人間 明和ケンサン会(大阪市)橘 嫌 い 秋蝶に まつ わられ める海 0 言葉の は みすばらし 塩辛い 新

大阪川柳会 黙々と 生きる (大阪市) 金井 文秋報 するむ

じゆうたんはいいなと云っスリッパー じゆうたんへ叙勲の沙汰を踏む心地 惜しそうに滴を干してめしにする 手帳パラパラどつちが先約やでよる 書き上げた安堵うつかり墨こぼし 入れて水薬 無抱き 金滋梅静 方翁志秋子 三雀里馬

相談欄

当り 障りも

なく裁

ゆきずりの街ふるさとに似て悲し

加

柳クラブ句

(加賀市

野村

味平

無邪気無我無意識無口

アベックは滴にぬれた 肩を

ほどなにやら

政

お悔みを言うにえくば邪魔になり

へ悲願を

高薫風報 久美子 くり虹風 平代羊郎雄平郎雄羊 さり 風のある日とは雨だれ知らず落ち

先ず金の要らんものから実施されぬくぬくと虫じゆうたんの塵に住る うちかけの裾じゆたんの緋にする 表向き 似合う色えらべば少しもの足らず じゆうたんの厚みへ運ぶ白い足袋 サービス満点広すぎる湯につかり 滴りに無抵抗石うが られ サービス が 懐具合 見抜い じゆうたんの厚さいたの先ず取られ お得意は無難な おしきせのサービス孫がしてくな 家で飲む無難な酒が じゆうたんの上で 仲よく 今 もつて 角の 玉造川柳会 無難に すんだ 社の 激しさ 恋人を 追う 品をすすめとき 取れない 話 大阪市) 気に 入らず 狆と猫 情なさ ても 如く てた

定刻に こんな金の使い方出来るのも役所 門限に遅れたベルは 着ぶくれへ押すだけ押い積み残し むつかしいものと決めてる公文書 退けどきはきつちり守つてい役所 二十一時バツジはずしてゆくとる 恥じることする気かバツジ裏返し 冬枯れの檻うごくものそこにいず 来た 退屈は 素直に 見てくれず 将棋 そつと 押し 差 L

有滋八一中性 牙雀郎舟尼 静 歩樹秋山

栄報 吸章 あい松 江雅き園 柳宏子雀 白八双章清 梅

公園を抜けてマスクをなおすなりスケッチもなかば公園たそがれる タ・ でよそのチームへホームラン を抜けてマスクをなおすなり 通 バス 酔どれる 日なたボツコや 隠すよに して 乳飲ませバスでせわしな京都奈良ドの話術に客も唄わされたの話術に客も明わされたス が きしんで 行く所 ク鹿もドルをか 句 i テの おけさで アベツク れをもてあまし 後姿で紳 孫の守り 通り過ぎ 眺めてる せいどり 児島 きみを トみ漫胡舞 ンの多 子る郎蝶扇 胡舞年春 ・ン子

1ない 病気遠くで 診てもらいあってお目出度でを婦人科医 かに踏んでゆき 立って 伸び なり 喜風光静金句清一久仙 女馬三坊子栄 らな 六竜子 九郎 子 姑にはあれもこれもが無駄に見っ お隣りのボヤを保険屋無駄にせず セールス の 何かを 摑む 無駄 で 買う 暮しに 無駄の 有難 層を 買う 暮しに 無駄の 有難 情熱の 詩人 質 屋 の 門を 出る 情熱の 詩人 質 屋 の 門を 出る 情熱の 詩人 質 屋 の 門を 出る 情熱を 手早く 隠す 髪 を か き 指揮搾が 魔法のように 動いてる まなばありかぶつたままでよー で 通郷へ 妻なら 無駄を 知り 乍ら 情熱を 背の 子へ 青春は すぎ 情熱を 手早く 隠す 髪 を か き 指揮搾が 魔法のように 動いてる おばあちやんの情熱見事な菊の花 にはあ 薬ほこりかぶつたままでよし 知 のボヤを保険屋無駄にせず JII は れもが無駄に見え 女 0 愚痴が出る 知 市 りを写動 無駄話

0

張り替えた障子に母の一般の如 生きて 女のご 粧いて亡き天の 影膳ソ

影性の

よし

ソッと 影

据

開けるだけ開け目

日ものぶる

0

0

碁

れた影を静

影が稲田

田度を

心に稲

2

田

走

b

栗のいがこを小つちやい宝ふるさとは父が 達者な 要ふるさとは父が 達者な 要 お カ 虫 も 太 実を守り 太い 奴 地 から あ 0 風 与六酔正 蝸 呂竜 志子升 則 牛

> なに 香が

いなにまで はずむ

丸酔 う

1

盃を

交し 1)

て心

温

知

ってお めら

動いてる すぎ き ぎ ず 3 一伊吞紅天美大未桂松夢 干蟠章句 津

七五三 親を

を

泣か

かせた

帯

白章

花 勝 歩志洋雨樹知破遂緑風迎翁

岩 新 岩 田 帯 り 帯 離さない 変え 藤井 正一勇昌清清明祥 朗報 朗郎 泉朗月

位置を

機康な 枕 並 べ た機康な 枕 並 べ た機康な 枕 並 べ たを 入れてお守り を 入れてお守り を 入れてお守り を 入れてお守し を 入れて

届い 0

た

K

菊

花

べた子のとする間に

大学を 教育ママ

0

眼で

見

0

白

柳

学

JII

(西宮

市

中

内孚彦報

隊が 出そうな道に

だらり舞妓へシャッ 帯の

"

1

タ柄

を

む

らくも

JII

柳会

枕妻 鉄 JII に親 秋一つばいに ま 世 た 朱の鳥 耳 141 掃除 居 É

虚勢張るそれも 事裡の 庭人の 包 大原野の 秋一つ。 の陽射し 匂いの 男としての へ挑んでる 物を 尚

たいでは、 ないでは、 隊が 出そうな道に 散る枯葉 いイスすればあげ足とる過剰 いイスすればあげ足とる過剰 と 水 蓮 の 間 に 秋 の 空 と 陽が 遊 ん で る 籔の秋 と 陽が 遊 ん で る 籔の秋 さからわず 意地 白万た杜求笛季水成宗 溪子 的み的女生賛客行悟高山鳥

善意

過

剰

の帯はチップを入れる場所 盃 盛んに 異 動 さ れ 一 なる 盃もらい 美無美敏正信芳俊加定證富和孝多保 保 子風風明二夫子夫代義水雄幸華朗 風風明二夫子夫代義水雄幸華朗

**—** 64 **—** 

労資とも強気 電車は 車庫にありばんばんの 強気は甘い 母があり追加した椅子は素うどんだけの客追加した椅子は素うどんだけの客を車の 椅子に 未来の 子を 数え食卓の 椅子に 未来の 子を 数え 還暦へ 若い 若いた 禿 昇髪還置暦をめへ 拝ス戦休卒家不私家 湿 美人もち、 2暦へこれからと云うプ 唇でまだせびられる んぐり川 ワ ますー 値上げ 1 句 おべべの てれくささ 若いと祝 柳会 分杯はレ 仏は 望みも キか (大阪 立妻 たの ワイ) 子の わん ノラン てへ けたとて 大学は 1 若任直さ くせしし 24 練る Ш 資 村 好郎 柳内泉浅快晓雪拝 紅 斧三 あ 万 溪 平 石 坊 歩 浮葉子 静章凡史胡 孚悪道隆仙柳二鴎薫 報 波子子好人 葉海水太起舟 彦郎雄 菜惠明石風

> 日の 丸の 旗が 強気に させた朝留収書 不渡り しらず 持ち 帰り 間収書 不渡り しらず 持ち 帰り 間収書 不渡り しらず 持ち 帰り かぶりつき体は椅子がら浮いて\*\* 次の間で幹事 ソロバン 弾き出し次の間で幹事 ソロバン 弾き出し 大間のあばた みにくい 椅子狙い椅子かたし 失意の 心なおかたし 美しき 抵抗 斜めに 掛ける 椅子失恋の たびに 強気に せる 恐さ 強気に吠えたが 餌で だまされる 何事 も 強気 な 女 恋 に お ち 好きと云わすまでほつておく強気 次の間を見ない 聞かない 独り酒 税務署の椅子へともかく気を鎮め 丸の 旗が 強気に 柳 会 長 の椅 痴薫誠孝白早い雄雪吸尚直岳琴一生 くり 幸斯忠一 太紅生 to 二子扇霧を峯男江史己太路征長坊子道司人

|茸のグラムを キロと 感ちが つりを返しに来 ズダン なり のまし 62 ス 一と星素茂瓢泉 きせえ斗女児太睦

文

化

祭協

賛句

の父父父の

気ものが大声

投投勘松無使鉄書書ち茸駄い一 ちが

い貰つ 少し

たお ぶは

気持

いようで切れる鋏を持てあ一つ使えぬ 娘で ジャズダ

ジョンとは遠

に JII

(大阪

市

III

村好

郎

報

悪駄話 まだ まだ ぐり川 まだ 柳 会 0 (羽曳野市) 勘ちが 13

覚

元めても ば

九

芯

出

金が

夕立を気にしながらも 郎 好美

夕立へ借り傘を貸す 羽目になり ハンカチを振つて別れてそれつ。 まだぬくいハンカチ胸に朝をゆく ヘベレケで帰り 夕立に 罪をきせ 待ちわびた 逢瀬を 流 す 俄が雨 夕立が 口実 パパの 縄 の れ ん 夕立が来て 負け将帳 分けとなり 選ざかる船上のハンカチ眼に残り 誰にも云を涙ハンカチだけが知り れンカチを 女房にかくし 洗う謎 夕立に 氷 の 看 板 淋 し そ う ハンカチを振る見送りにも涙見え 新郎の白い ハンカチも 嬉しそう あなたを清い交際 こロいハンカチ でれかくしハンカチで出ぬ汗をま 夕立のおかげで 意見 しまいなり 好石立ひ 青伸 貴生 道と白ひ 一悟 か 郎秋夫る波 子長夫る扇み子空 ー悟ま直照ッ岳の功美文 子空と己代ム太子雄蓉代

ものそろいも揃つて\*~眠るんのハゲがちよつと気ニセールが 日本で一番偉く 見えんが 日本で一番偉く 見え声 で 朝 目 が さ め た 番偉く (竹原 市 Ш 内静 水報 勝洋康久 彦子宏子

二坪の 脱殼機 小春日 お互 のん気だと言れ無事故で勤め上げのん気でもなるハイヤー向を変え 歯を磨き今日もきれいな嘘をつき あなたへの土産に 阿蘇の サボテンに笑われそうな自己嫌悪 麦蒔をカラスそこまで 連れがいてのん気の程も許されず 留守番がのん気な子だを念を押し 共稼ぎけつこうのん気にやつてい 二重〇すばらしい字だとほめてす 私に だけは 素晴しい 父ちやんが 父ちやんが生まいたとシュンとなり エプロンの紐をファイトキュツを締め 病む我に無職と 書かす 欄があり 父となる日が 恥ずかしいからディト 夜と 恥ずかしい ん気だと言れ無事故で勤め上げ チンコに通う父ちやん僕は好 0 Ü い眺 嫁に 心に 42 今日 行楽 環 海 頭もだい へ二人の 触れてペ 素直 頼つて叱 も荒 嫁は を破る ついに 近し フアイトが出 主婦の 最初の 闘 な う 花 捕え 音を ホットする 人に 肩が 共 御 3 婿 見合だけ 煙つめ られ 立て の稼 見え 決め 眺め 10 そのみ 恵憲和津子次幸 和保 吞ひ 春 一雅正季錦鉄澄笹俊 憲和清 さし 月 居 尾 男路鳳 子緑 電 吾人恵舟勝

欲せずやキツスせず やと 飯半分 茶漬け に させた うどんやで 煤けたままの 泣きねいりした子に枕そつと入れ 負けん気のよちよち歩きが枕くれ 大言壮語斗志と 酒で 生きており よろしくと 斗志迎えた 握手する 家柄が何処かに にじみ出る 気品 家柄のいとさんたと焼買うて去に かまきり 口紅はきれいに 塗つてする へお札枕 柳句会 聞いているやらいないやら の斗志所詮は 富田林市 の下へ 鶏の餌 口の紅 時間表 時間表 遅刻 阿部柳 多佳子 東雲楼 六竜子 摩天郎 太報 美 重子 中

警棒もルージュのピケをもてある ほめら れた 嬉しさ 枕高う 寝る

浮気して今更女房の

良さを

浮気する 元気 若さは

得心をした 子の 針のみぞわたしも通らぬようにす ネンネコをとれば 席ゆずる い人にひよつこり逢る燃え 静か 私 なる程 まだ が恥かし なる 男の子 寝息

手作業 男泣きやつばり妻も 泣いて くれ 家ゆれるデカンショ学徒の送別会 円玉無し 赤い 羽根やめとこう い羽根胸に付いてる気の 海川柳会 へ講読料 でその伝統を の容 (大阪市 赦 強さ 圭水報 圭 水翁太郎山子

紀松世 静 房 美風 枝焼

枕出しこれから本気で寝るつもり 逝きませし 夫の 枕 ならべ 7 寝

門を

這入ると 家柄と いう 重み

野 X 3

浮気して 夫婦 喧嘩のたえまなし 浮気止め真面目になれば中風が出 浮気者たまの真面目をうたがわれ 本陣に火が 付きそうで 浮気やめ アルバイトさして浮気に気を配る 直す 薬 ないかと 尋ねられ (大阪市) まだ残り 味気なさ しいるの 過し 田中多幸 吉一弘濁久清源一芳多 蔵休生水江江川登

盛りをば過ぎた 浮気の

火遊びのつもりの

浮気度を

浮気にもかわいらしさが欲

貧相な

顔にも

金が

3

城北明老会

報

折詰・出張パーテイ

935 . 南区畳屋町三ツ寺センター TEL 9 (211) 1 8 4

重笑

### 美し い新春を祝す

### 川柳大阪

川柳部長

北

JII

春

巣

[13]

橋

本

緑

大阪市交通局川柳会

#### JII 柳塔社常任理事

宏

員

酔升

永

田

一六竜子

高須み

0

集

児島

图与图志

橋本

雅巣

神子

0

ぼ

3 舟

綿木

松亭

室谷

鉄

小

田

垣

蝸牛

米虫

乃字

岡

島

孤舟

福

島

正

則

富

淡舟

浜

畑

胡

西岡

洛酔

塚

步

操東

清

流

野

久峰

菊川 橘 菊 70 河小大 沢 村 高  $\mathbb{H}$ 井 相 III 坂 薫 小 12 好 庸 恒 形 す さむ 松園 25 風 郎 佑 明 水 吉 不 西 傍 清 正 儿 戸 本 田 田尾 田 H 島 水 圭井堂 水 柳 古 静 É 栞 方 馬 柳

編 集 後記。

じめ、鞍馬、大八、佐保蘭▽「川傍柳初篇研究」をは

生の「川柳点における軽妙 集」のあとへ、阿達義雄先 ▽同人作品「ゆーもあ特

ど協力をたまわった。厚く 伸びろと、大ぜいの方から にかぎりとしたが、川柳塔 わびいたします。 まわってしまったことをお ▽年賀広告は、ご希望の方 諸先生の原稿が全部次号へ 洒脱」にご登場ねがつた。

るとまではいかなくても編 集部は馬力をかけます。 ▽本年こそは天馬空を馳け から味読してください。 いい勉強になると思います (不二田一三夫)

意にむくいることにした。 ▽72ページにしてそのご厚 お礼を申しあげます。

集

近作 柳 樽 10

句

江尾

栞

選

(各題 10 句以内)

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。 達借早 0 浜高山 米操静 雄子水 選選選

(1月15 若北 日 本川 島 締 切 生 一々庵 志 選選 111 柳 꺄 月号発表 塔

(10何)

中若北

島本川

選選選

巣

一年年分

千四百四十円 七百五十円

(送料負担) 33

料

共

生々庵志

(2月15

日

締

切

定価

百二十円

JII

柳

塔

(10句)

三月号発表

課 近 作柳樽 吟 0 (各題 10 句 10

川菊

沢

松園

昭和四十一年一月 一 日昭和四十年十二月二十五日

印

行刷

郎

大阪市南区鰻谷中之町二〇ँ地

中 島

蓬

郎

選選

句以内)

BI 発網

刷 行集

所 人兼

大陽印

刷株式会社

田山早 垣上川 Ŧ 方太清 大郎生 選選選

発

行

所

111

社

振替 口座 大阪·三三三六八番

電話大阪・二七一-三九八五番

阪市南区鰻谷中之町二〇崙地

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。 ★川柳塔の投句は本社同人に限ります。

は楷書で新かなづかいにしてください。

本社新春 句

3 3

十年度全出席者表彰 各題三句

兼題

月七日 市電千日前下車スグ北 電話211 午後六時 若若八橋中 8

日時

金

柳木 高 多 潮天薫生 志花郎風々

選選選選庵

★電話での投句や訂正はご遠慮願います 大阪市南区製谷中之町20 社 JII 柳 塔

電話大阪(271)3985番

2月の

「童 話」 Tt  FE 角」 「重 11



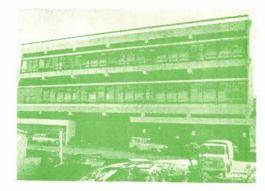
スマートで 着心地のよい



株式会社 TX7

奥新和歌浦

• 雜 賀 崎



国際観光旅館



TEL 和歌山(44)0431・1186代 大阪案内所(641) 3 5 6 4 誇る岩炭を

料理も電話も



ここがいちばん

TEL (541) 551-2

広 東 料 理

### 豚饅



### 焼売

大阪なんば

◆出 張 販 売 店◆

なんば高島屋店・心斎橋そごう店・梅田阪神百貨店 天満京阪ストアー・弁天阜顕港店・中之島サン・ストアー  しあわせ祈る初詣も お正 こたのしいお出かけも近鉄特急!



#### 伊勢神宮初詣



大阪・名古屋から 伊勢市・宇治山田へ

近鉄"初詣特急、增発 伊勢神宮初期記念東軍券上初期職 時特惠の座席指定特急券 餐売中 大阪上本町から1時間51分 座席指定特急券とも月道 630円

京都から(八木のりかえ)2時間21分 " 片道 830円 名古屋から1時間18分 " 片道 530円

から みないを 野田 伊藤 小田 みた 一次の一次の間が入っている(1) カンダー・

▶神宮参拝と伊勢志摩スカイライン・鳥羽コース…字語山田駅・伊勢市駅前から回遊観光パス ガイド・おみやげつき 590円 こども400円

▶ 伊勢 中、中国語と伊美士宣告する公園監修 伊勢 神宮と世勝(神空に無い力語) 元章 注意を全と 近畿日太 フーリスト・日本 京通会社・日本原子会の教業所へ工程総ください 近畿日本フーリスト 海郊田上 12-203 2875 神 リキラマ: 39-4761 名声写中 9571-2531 大阪土本田1771-0313 大阪記記事業202-0221 京都タワー 37-8655 名声報今世731-4265

近鉄

酒

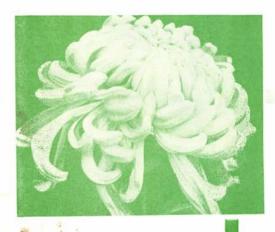
8

8

200

8

8



一番よい酒

第 正 点

宮内庁和用途 菊正宗酒造株式会社 神戸・灘・御影